

陸前高田市文化財調査報告第19集

貝畠貝塚発掘調査報告書

平成10年3月

陸前高田市教育委員会

発刊にあたり

陸前高田市には、縄文時代をはじめとする各時代の遺跡が多く存在しています。これらの遺跡は、先人たちが歩んだ生活の跡であり、市内に約220ヶ所が確認されています。

先史、歴史のいずれの時代を問わず、本市のあゆみを知る貴重な文化遺産である遺跡は、現代に生きる私たちに生きた学習の場を提供してくれるものもあります。

しかしながら、近年は、経済・社会情勢の大きな変化による開発事業の増加とともに、緊急発掘調査の数は全国的に急増する傾向にあり、埋蔵文化財はその姿を消しつつあります。このことは、本市においてもその例外ではなく、ここ数年、道路改修や宅地造成等に伴う緊急発掘調査の数は増加する傾向にあります。

私たちは、このような埋蔵文化財を後世に末永く伝えるため、常に責任をもってその保護と活用に努めていく必要があります。

本報告書は、個人所有の畠地の宅地造成に伴う貝畠貝塚の緊急発掘調査の成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代、平安時代の住居跡等が発見されましたが、過去の調査結果を含め、これまでに確認された竪穴住居は、縄文時代中期のものが20棟、平安時代のものが10棟を数えます。このような竪穴住居が密に検出された例は気仙地方では少なく、非常に貴重なものであり、集落形成を知る上で重要な遺跡であると思われます。

貝畠貝塚は昭和58、59年にも二ヵ年にわたる緊急発掘調査が実施されており、その成果は、陸前高田市埋蔵文化財報告書第8集「貝畠貝塚発掘調査概報」としてまとめられています。本報告書と併せて広く活用され、文化財保護のための一助となれば幸いに存じます。

おわりに、この発掘調査を実施するにあたり、ご理解とご協力をいただいた関係者の方々に対し、心より感謝を申し上げます。

平成10年3月

陸前高田市教育委員会

教育長 熊谷 眠男

例　　言

1. 本報告書は、平成9年度に国庫及び県費補助を受けて、岩手県陸前高田市高田町字西和野地内に所在する貝畠貝塚の発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、宅地造成に伴う緊急発掘調査である。
3. 調査面積は、472m²である。野外調査は平成9年10月15日から12月24日までの期間で実施した。
4. 調査体制は、次のとおりである。

団　　長　陸前高田市教育委員会教育長　熊谷睦男

総　　括　陸前高田市教育委員会社会教育課長　上部修一

事　務　局　陸前高田市教育委員会社会教育課長補佐　菊池政雄

調　査　員　陸前高田市立博物館主任兼学芸員　佐藤正彦

　　陸前高田市立博物館主事兼学芸員　熊谷賢

　　陸前高田市教育委員会社会教育課主事　高橋和弥

調査補助員　上野立子、菅野美代、紺野志賀子、斎藤すみ子、佐藤多恵子、佐藤とも子、鈴木キミ子、鈴木艶子、鈴木貞子、村上泰子、村上典子、吉田チヨ子、渡辺和子

整理作業員　小山典子、黄川田澄子、佐藤紀代子、佐藤とも子、鈴木キミ子、村上典子、吉田泉

5. 調査及び整理に際しては、次の方々のご指導、ご協力をいただいた。記して感謝を申し上げる次第である。（順不同）

　　陸前高田市立博物館専門研究員　細谷英男氏

　　三陸町教育委員会　佐々木洋氏

6. 石器の石材鑑定は、大船渡市立博物館学芸員白土豊氏に依頼した。

7. 掲載した土層の色調は、『新版標準土色帖』第4版（小山正忠、竹原秀雄 1973年）による。

8. 本報告書の執筆は、佐藤、熊谷、高橋が行い、編集は佐藤が担当した。

9. 本遺跡から出土した遺物と調査記録は、陸前高田市立博物館に保管している。

10. 野外調査においては、佐々木利助氏、鈴木善久氏のご協力いただいた。

目

次

発刊にあたり

例言

目次

I 調査に至る経過及び調査過程	1
II 遺跡の位置と環境	1
III 基本層序	3
IV 周辺の遺跡	3
V 発見された遺構	5
1 A区	7
(1) 壺穴住居、住居状遺構	7
a、 A 01-1 住居	7
b、 B 01-1 住居	7
c、 A 02住居状遺構	14
d、 A 03-1 住居	14
e、 D 02-1 住居	16
f、 C 05-1 住居	16
(2) ピット	18
2 B区	19
(1) 壺穴住居、住居状遺構	20
a、 I 00-1 住居	20
b、 G 03-1 住居	23
c、 I 05住居状遺構	29
(2) ピット	29
a、 G 06、 H 04、 H 05、 I 04、 I 05ピット群	29
b、 H 00、 H 01ピット群	32
c、 G 02、 H 02ピット群	34
d、 H 02、 I 02、 I 03、 J 01、 J 02、 J 03ピット群	35
e、 I 04、 J 04、 J 05ピット群	38
VI まとめ	39

挿 図

第1図 貝畠貝塚位置と発掘箇所	2
第2図 基本層序	3
第3図 周辺の遺跡分布図	4
第4図 貝畠貝塚遺構配置図	5
第5図 A区遺構配置図	6
第6図 A 01-1 住居、B 01-1 住居	9
第7図 A 01-1 住居、B 01-1 住居	10
第8図 A 01-1 住居、B 01-1 住居 出土遺物	11
第9図 A 01-1 住居、B 01-1 住居 出土遺物	12
第10図 A 02住居状遺構、A 03-1 住居	13
第11図 A 02住居状遺構出土遺物	14
第12図 D 02-1 住居	15
第13図 D 02-1 住居出土遺物	16
第14図 C 05-1 住居	17
第15図 B区遺構配置図	19
第16図 I 00-1 住居	20
第17図 I 00-1 住居	21
第18図 I 00-1 住居出土遺物	23

目 次

第19図 G 03-1 住居	24
第20図 G 03-1 住居	25
第21図 G 03-1 住居出土遺物	27
第22図 I 05住居状遺構、G 06、H 04、 H 05、I 04、I 05ピット群	28
第23図 H 04、H 05、I 04、I 05 ピット群出土遺物	30
第24図 G 06-1、H 05-3 ピット 出土遺物	31
第25図 H 00、H 01ピット群	32
第26図 H 01ピット群出土遺物	33
第27図 G 02、H 02ピット群	34
第28図 H 02、I 02、I 03、J 01 J 02、J 03ピット群	35
第29図 H 02、I 02、I 03、J 01 J 02、ピット群出土遺物	37
第30図 I 04、J 04、J 05ピット群	38

写 真 版

写真図版 1

発掘区全景、A01-1 住居跡平面、A01-1 住居跡土器出土状況、B01-1 住居跡平面、B01-1 住居跡複式炉断面、A02住居状遺構・A03-1 住居跡平面、D02-1 住居跡平面、A01-1・B01-1・D02-1 住居跡・A02住居状遺構平面

写真図版 2

C05-1 住居跡平面、I00-1 住居跡平面、I00-1 住居跡炉平面、G03-1 住居跡平面、G03-1 住居跡土器出土状況、G03-1 住居跡石刀出土状況、I02-2・3 ピット土層断面、I02・J02 ピット群平面

写真図版 3

H01-3 ピット土層断面、J04-2 ピット土層断面、H05-1 ピット平面、H04-2 ピット土製品出土状況、

G06-1 ピット土層断面、G06-1 ピット土師器出土状況、H05-4 ピット土偶出土状況、B区近景

写真図版 4

A01-1 住居跡・B01-1 住居跡出土遺物

写真図版 5

A02住居状遺構・D02-1 住居跡 I00-1 住居跡・G03-1 住居跡・H04-1・H05-6 ピット出土遺物

写真図版 6

H04-1・2 ピット、H05-3・4・6 ピット、I04-2 ピット、G06-1 ピット、H05-3 ピット、H01-1・2・3 ピット、H02-3 ピット、I02-1・3 ピット、I03-2・4 ピット、J02-1・2 ピット出土遺物

表

第1表	周辺の遺跡一覧	4
第2表	A01-1 住居、B01-1 住居	10
第3表	A01-1 住居、B01-1 住居 出土土製品	12
第4表	B01-1 住居出土石器	12
第5表	A02住居状遺構、A03-1 住居	13
第6表	A02住居状遺構出土石器	14
第7表	D02-1 住居	16
第8表	C05-1 住居	17
第9表	ピット一覧表	18
第10表	I00-1 住居	22
第11表	I00-1 住居出土石器	23
第12表	G03-1 住居	26
第13表	G03-1 住居出土石器	27
第14表	G06、H04、H05、I04、I05 ピット群一覧表	29
第15表	H05-6 ピット出土土製品	31

第16表	H04-1、H05-3、I04-2 ピット出土石器	31
第17表	G06-1、H05-3 ピット出土 土師器、須恵器	32
第18表	H00、H01 ピット群一覧表	33
第19表	H01-1、3 ピット出土 土製品	33
第20表	H01-3 ピット出土石器	33
第21表	H01-3 ピット出土土師器	34
第22表	G02、H02 ピット群一覧表	34
第23表	H02、I02、I03、J01、 J02、J03 ピット群一覧表	36
第24表	I03-4 ピット出土土製品	37
第25表	I02-3、I03-4、J02-2 ピット出土石器	37
第26表	I04、J04、J05 ピット群 一覧表	39

I 調査に至る経過及び調査過程

本発掘調査は、宅地造成に伴う調査である。

平成8年、地権者の佐々木利助氏より所有地内の畠約472m²を宅地造成したいとの申し出が当市教育委員会になされた。

貝畠貝塚は、昭和58年度から翌59年度にかけて今回と同様の緊急発掘調査が実施されているが、この調査結果から、今回の予定工事区域に竪穴住居等の遺構が埋蔵していることが予想され、現地踏査を実施し検討した結果、発掘調査が必要との判断から、その旨を地権者に伝えた。

その後、地権者からは発掘調査にかかる経費の個人負担は困難であるため、平成9年度の補助事業として扱ってもらいたいとする依頼があった。

平成9年7月22日、地権者から文化財保護法第57条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出がなされ、当教育委員会の現地調査書を添え、同日付けで岩手県教育委員会事務局文化課に進呈した。

平成9年7月28日、県教育長から工事着手前の発掘調査を行うよう文化庁の指導があった旨の通知があり、地権者へ伝達した。その後、地権者から平成9年7月30日付けで文化財保護法第98条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知がなされた。

発掘調査は、当初、平成9年の9月上旬の開始を予定していたが、堂の前貝塚及び中沢浜貝塚の発掘調査が延びたため1ヶ月ほど遅れ、平成9年10月15日の開始となった。

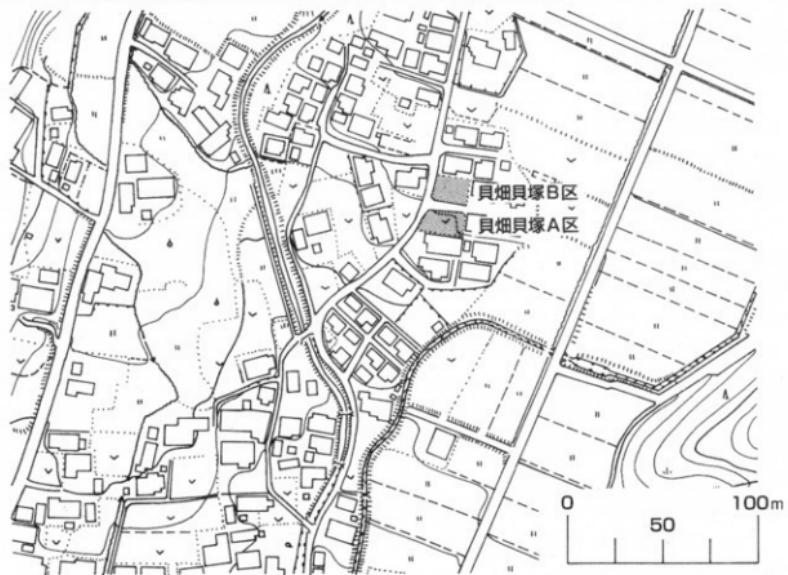
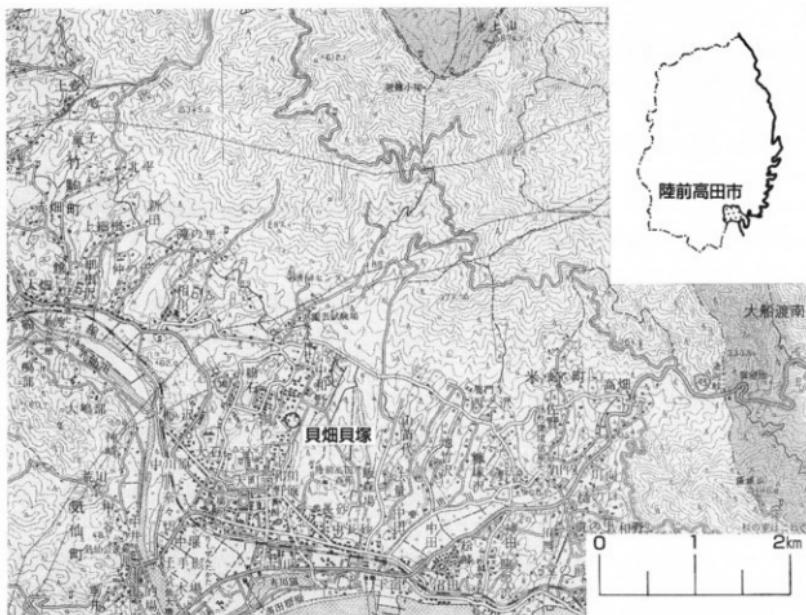
調査は、はじめに調査区の北側半分から開始し、住居跡5棟、ピット69基の遺構を確認した。北側は平成9年11月25日に終了し、重機による埋戻し作業を行うと同時に、南側の調査区の表土剥ぎも行った。南側の調査区からは、複式炉を伴う住居跡など6棟、竪穴住居状遺構1棟、ピット21基を確認し、12月24日に調査は終了した。また、同月26日には、高田小学校の教師・児童を現場に招き、現地説明会を実施した。

II 遺跡の位置と環境（第1図）

貝畠貝塚は、岩手県陸前高田市高田町字中和野地内に所在し、JR大船渡線陸前高田駅より北東へ2.2kmの地点に位置する。

気仙郡住田町土倉峰に源を発し、北上山系の山々を浸蝕しながら南流する総延長40kmの気仙川は、陸前高田市に入って標高874.7mの水上山の西側山麓を南流し、やがて広田湾へと注ぎ、河口部付近に南北2km・東西2.5km程の三角洲性平野を形作る。広田湾の北にそびえる水上山は、衣太手神社・登奈孝志神社・理訓許段神社の延喜式三内社を祭り、古来より信仰を集めてきた靈山で、山の西側・東側の山麓には2km程の長さの丘陵地・緩斜面が拡がり、その前面には前述の三角洲性平野が拡がる。現市街地は、広範な丘陵地・緩斜面・三角洲性平野上に形成される。遺跡は、水上山の南側に拡がる緩斜面のほぼ中央部に位置し、標高25mで、遺跡の西側は川原川によって、東側は沢によって開析される。

遺跡の周辺は宅地化が進み、現在、遺跡は半壊状態にある。古くより「貝子畠」の屋号の家が存在し、かつては貝の散布がみられたそうであるが、散布地点はすでに宅地造成により破壊され、貝層は壊滅状態にあると思われる。



第1図 貝塙貝塙位置と発掘箇所

III 基本層序（第2図）

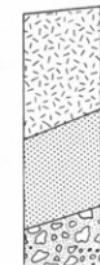
発掘区は、氷上山から緩やかに延びる斜面上に位置し、標高は23mから24mを測る。斜面の上位に位置する北側調査区（B区）では、地山面までの層位が18cmと浅いが、道路を挟んだ南側調査区（A区）の下位においては、層位は70cmと幾分厚さを増す。層の堆積は、調査区の北側・南側ともに単純な堆積状況を呈し、基本的な層区分は以下のとおりである。なお、図示した層序は、本発掘区では最大の層厚を測るA99グリッドの西壁である。

L=23.5

第I層 表土ないし耕作土。斜面の上位においては厚さ約10cmと薄いが、下位では最大層厚30cmに及ぶ。色調は10YR3/2の黒褐色。
A区・B区では若干性状が異なり、B区では、炭化物・焼土が無く礫が少量含まれ固いが、A区では炭化物・焼土を微量に含み礫は無く柔い。

第II層 色調は10YR3/4の暗褐色。斜面の上位から下位にむかって層厚を増す。性状は、第I層と同様、A区・B区とも多少の差異が見られ、B区では、炭化物・焼土が含まれないが、南側では微量ではあるが含まれる。礫は北側・南側ともに少量含まれる。

第III層 地山である。



第2図 基本層序

IV 周辺の遺跡（第4図・第1表）

陸前高田市内には、消滅したものも含め 220ヶ所を越える遺跡があり、貝畠貝塚の所在する高田町では、24ヶ所の遺跡が確認されている。これらの遺跡は、氷上山（874.7m）より南に延びる丘陵の東側の山苗代地区、西側の和野地区の二地区に集中しているのが特徴であり、遺跡の立地は、標高約100m以下の丘陵上に集中し、現在の市街地のある高田平野のような低地帯には、小泉遺跡を除くとほとんどが見られない。

山苗代地区には荒沢遺跡（奈良・平安）、豆の通遺跡（後期・奈良・平安）、山苗代遺跡（奈良・平安）、小泉遺跡（奈良・平安）などが所在している。この内、小泉遺跡からは、昭和55年に用水路を設置する際、地表下1mの地点において奈良時代末から平安時代にかけての土師器・須恵器が多量に発見され、これらの中には「羽」「主」「集」の墨書き土器も含まれている。

和野地区には、貝畠貝塚や、小森前遺跡（中・後期）、西和野遺跡（中期・奈良・平安）、鳴石遺跡（後・晚期）、瓜畠遺跡（後・晚期）などが所在している。

遺跡の時期は、和野地区周辺においては、繩文時代中期から晩期にかけての遺跡が多く、山苗代地区においては奈良・平安時代の遺跡が多く分布する傾向がある。

本市における奈良・平安時代の遺跡の立地を考える上で、金山との関連を推定するのは重要なことであろう。氷上山には衣太手神社・登奈孝志神社・理訓許段神社の延喜式内三社が鎮座し、高田町西和野には、その内宮である氷上神社があり、氷上神社を中心に本市が開けてきたことは想像に難くない。また、前九年の役に登場する金一族についても、未だその本拠地は不明であるが、玉山金山等の支配権をもとに、その勢力基盤を維持していたものと思われ、氷上山麓における奈良・平安時代の集落の変遷は本市の成り立ちを考える上でも重要であると思われる。



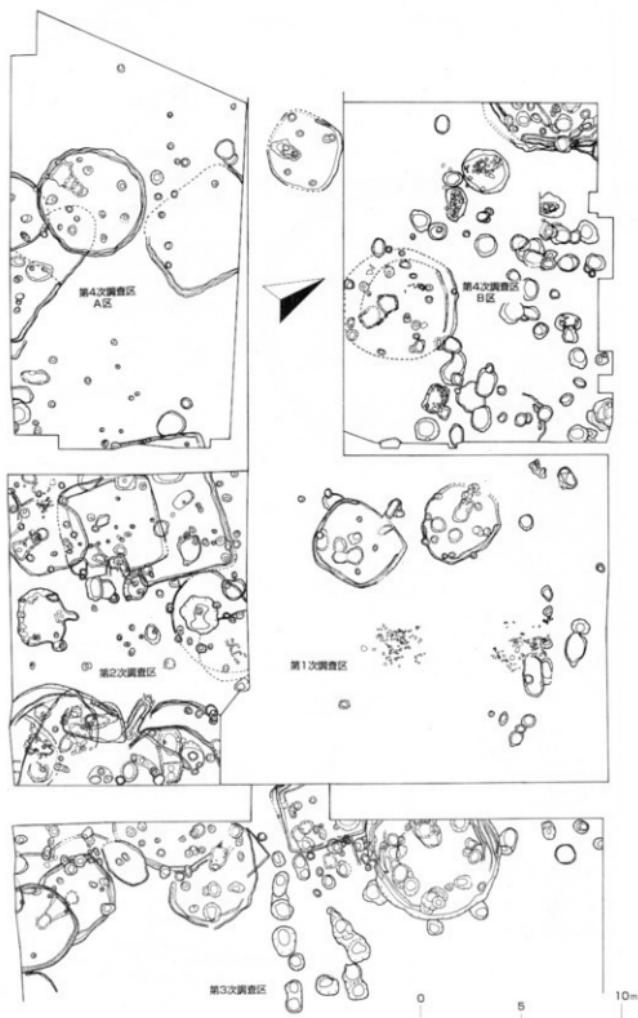
第3図 周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧

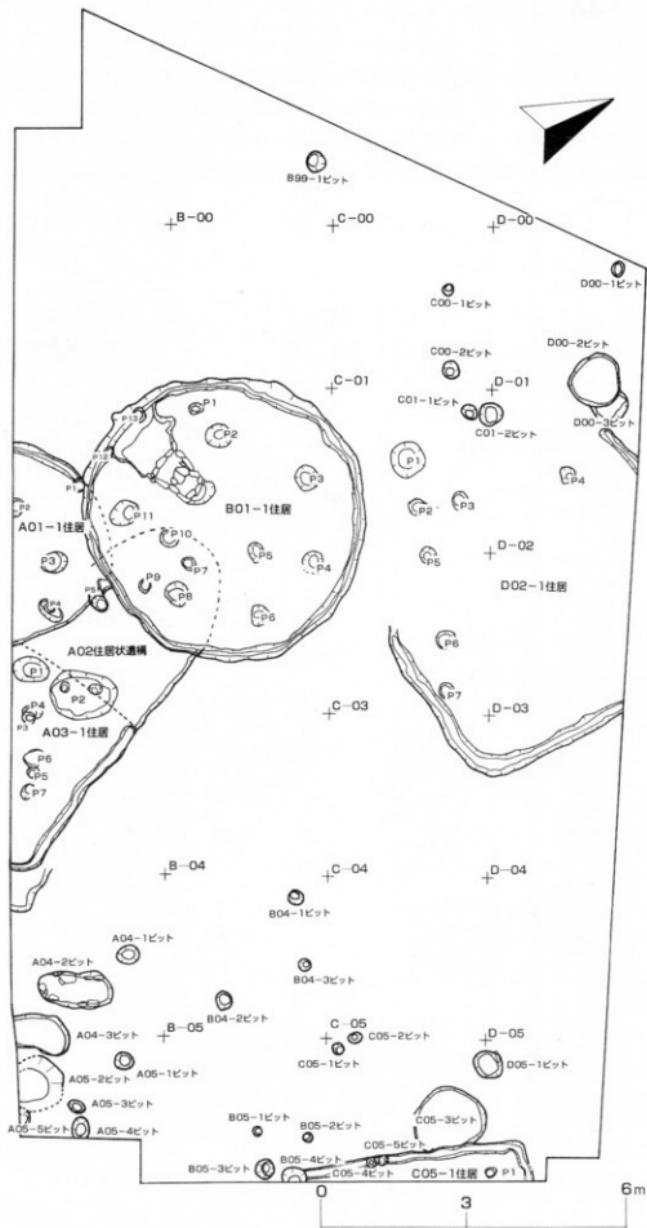
No.	遺跡名	所 在 地	コード番号	種 別	遺 構・遺 物	備 考
1	相川 I	竹駒町字相川	NF57-2045	散布地	縄文土器（後期）・土師器・須恵器	
2	相川 I	竹駒町字相川	NF57-2102	散布地	縄文土器	
3	橋ヶ沢	高田町字橋ヶ沢	NF57-0038	貝		
4	鳴石	高田町字鳴石	NF57-2182	散布地	縄文土器（後期・晩期）	
5	西和野 I	高田町字西和野	NF57-2185	散布地		
6	小森前	高田町字西和野	NF57-2197	散布地	縄文土器	
7	高畠城	高田町字本丸	NF57-0172	城跡跡		
8	洞の沢	高田町字洞の沢	NF57-0163	散布地		
9	西館	高田町字木太丸	NF57-0089	散布地	土師器・須恵器	
10	下和野	高田町字下和野	NF57-0262	集落跡		
11	西和野	高田町字西和野	NF57-0155	集落跡	縄文土器（中期）・土師器・須恵器	
12	貝塚	高田町字下和野	NF57-0147	貝塚	縄文土器（中期・後期・晩期）	
13	中和野 III	高田町字中和野	NF57-0230	散布地	縄文土器	
14	中和野 II	高田町字中和野	NF57-0200	散布地	縄文土器	
15	西和野 II	高田町字西和野	NF57-2189	散布地・包含地	縄文土器・土師器	
16	中和野 I	高田町字中和野	NF57-0167	集落跡		
17	瓜畑	高田町字中和野	NF57-2241	散布地	縄文土器（後期・晩期）	
18	太田	高田町字		散布地		
19	飯森場	高田町字飯森	NF57-0294	散布地		
20	山畠代	高田町字山畠代	NF57-0258	散布地	土師器・須恵器	
21	豆の通	高田町字荒沢	NF57-0239	金穴跡	縄文土器（後期）・土師器	
22	荒沢 I	高田町字荒沢	NF57-0301	散布地		
23	荒沢 II	高田町字荒沢	NF57-0300	散布地		
24	大隅 II	高田町字大隅		散布地		
25	大隅 I	高田町字大隅		散布地		
26	小坂	高田町字中田		散布地		
27	地竹沢 I	米崎町字地竹沢	NF57-0335	散布地	土師器・須恵器	
28	地竹沢 II	米崎町字地竹沢	NF57-0382	散布地	縄文土器・フレーク	
29	中山館	米崎町字野沢	NF57-0379	城跡館	土師器	
30	野沢 III	米崎町字野沢	NF58-0060	散布地	土師器・須恵器	
31	野沢 II	米崎町字野沢	NF58-0060	散布地		
32	野沢 I	米崎町字糖塚沢	NF57-0328	散布地	土師器・須恵器	

IV 発見された遺構（第4図）

貝畠貝塚は、昭和58・59年に、宅地造成に伴い、私道新設部分と宅地造成部分の約1000m²の発掘調査が行われている。その際には、縄文時代の竪穴住居19棟・平安時代の竪穴住居8棟・配石遺構2基・ピット約50基・炉跡2基・工房跡2基が確認されている。平成9年度に行った調査は、昭和58・59年に調査を行った私道の南側と北側の畠地で、前回の宅地造成部分の西側に隣接している箇所である。



第4図 貝畠貝塚遺構配置図



第5図 A区遺構配置図

調査の結果、縄文時代の竪穴住居や平安時代の竪穴住居、ピットなど、多数の遺構が確認されている。ここでは便宜上、私道の南側をA区、北側をB区として、以下、各遺構の概要について触れる。

1 A区

A区において検出された遺構は、竪穴住居6棟、住居状遺構1棟、ピット21基である。遺構の分布は、発掘区の西側と中央部では少なく、南壁寄りでは密に分布している。

(1) 竪穴住居

a、A01-1住居（第6図・7図、第2表、写真図版1-2・8）

A区調査区の南壁際のA01・A02グリットの地山面において全体の1/3程を検出した。残りは未発掘区に広がる。切り合いは、A02住居状遺構・A03-2住に埋土の一部を切られ、B01住の埋土の一部を切っている。形状は、円形あるいは橢円形を呈すると思われる。規模は、検出部分での最大幅は3.6mで、深さは地山面より0.24mである。埋土は、色調から2層に分けられ、1層は暗褐色土で多量の炭化物、微量の焼土、20×10cm前後の礫を少量含み、2層は暗褐色土で、炭化物・焼土は見られず、10cm前後的小礫を少量含んでいる。1・2層とともに自然堆積である。壁は、西壁・東壁とともに外傾して立ち上がっており、西壁では、壁の直下に溝を有している。床面は、凹凸はあまり見られず、ほぼ平坦で、硬く締まっている。床面においてピット3基と、壁を切るピット2基を検出したが主柱穴は不明である。

〔出土遺物〕（第8図1～7、第9図25、第3表、写真図版1-3・4-1～7・25）

出土した遺物は、土器・土製品がある。土器は、埋土中より破片95点（うち底部2点）が出土した。7点を図示した。1は波状口縁、2・3・5・6は平縁をなす深鉢の口縁部片である。口縁部は、1は頸部で締まり外傾し、2・3は内湾、5・6は外反している。文様は、1は、隆線と縄文原体の側面圧痕による。2は、原体施文後に隆線を張り付ける。3は、口縁部に口唇に平行する一条の隆線が巡り、頸部には二条の隆沈線と橋条突起を有し、口縁部と体部を区画する。橋条突起には隆沈線が連結し、渦巻き文と円文を意匠する。体部には、地文と隆線によって文様が意匠される。5は、口縁に平行する隆線を有する。6は、口縁部は外反する。口唇部直下から縦位の櫛引文を有している。4・7は深鉢の体部片である。4は隆線による渦巻き文、7は沈線と磨消縄文による橢円区画文を有している。土製品は土製円盤1点が出土した。25は土製円盤である。周縁を磨き、橢円形に作り出している。

〔時期〕

床面からの出土遺物が無く、時期を決定するには至っていない。

b、B01-1住居（第6図、第2表、写真図版1-4・5・8）

A区南壁寄りの、A01・A02・B01・B02・C01・C02グリットの地山面において検出した。検出面はほぼ平坦であるが、住居跡の西側は、川原川方向に傾斜している。切り合いは、A02住居状遺構・A01-1住居によって埋土の上位の層の一部が切られるが、保存は極めて良好である。形状は、ほ

ば円形を呈しており、規模は、炉の長軸方向で5.42m、短軸方向で5.16m、深さは0.13m～0.45mである。埋土は、8層からなり、自然堆積である。床面直上には焼土・炭化物が多量に見られる。焼土は、南西側と、A02住居状遺構に切られる南東側を除く壁際にはほぼ全周するような形で厚く堆積している。炭化物は、北側の全体の1/4ほどの範囲に見られ、焼土上に厚く堆積している。壁は、急傾斜に外傾しており、壁直下には巾20cm程度、深さ32～42cmの溝が全周に巡っている。床面は、平坦で、固く縮まっている。ピットは、床面において11基検出されている。このうち、P7・P8・P9・P11・P13・P16の6基が主柱穴と考えられるが、埋土は自然堆積で、柱あたりはみられない。炉は、東北東－西南西に主軸をもつ石組複式炉で、全長205cmで、2基の石囲い部と前庭部からなる。中央寄りの石囲い部（石囲い1）は、60×60cm・深さ14cmの長方形のもので、長さ13cm～30cm程の扁平な礫8個を縦に据えたもので、うち2個の礫は、もう一基の石囲い部（石囲い2）と共用している。石囲い1の底面には土器片が敷き詰められている。埋土には、炭化物が少量、焼土が微量含まれる。石囲い2は、75×60cm、深さ10cmの長方形のもので、14個の扁平な花崗岩礫を縦に据えたものである。底面には5個の土器片が見られ、その上面には厚さ8cm程の炭化物の層が堆積している。前庭部は、90cm×112cm、深さ22cmの長方形状で、住居の周縁まで達している。底面は船底状で、直上には厚さ10cm程の炭化物の層が堆積している。

〔出土遺物〕（第8図8～24、第9図26～41、第3表、第4表、写真図版4～8～41）

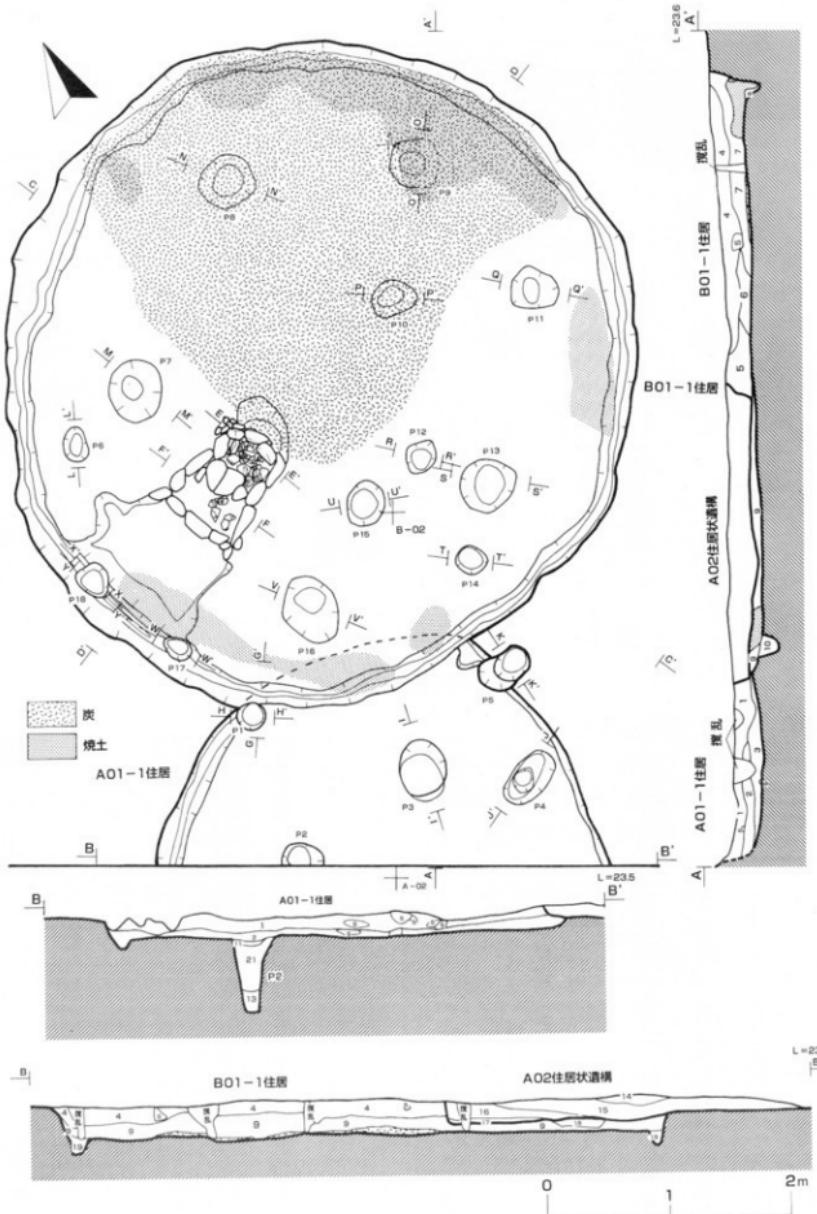
出土遺物は、土器・土製品・石器がある。土器は、埋土より破片2196点（うち底部53点）、炉内部より110点（うち底部2点）が出土した。17点を図示した。8～10・13～15・17～22は深鉢の口縁部片である。口縁は、9・19・21・22が波状口縁をなし、他は平縁をなす。口縁部は、10・16・17・19・20が外傾、8・9が内湾、14・15・21・22が外反、18は頸部で一度縮まり内湾している。文様は、8～10は二条の隆線によって、14～16は沈線によって梢円区画文が、17・18は沈線によって曲線文が、19は隆線によって曲線文が、20～22は列点文と沈線あるいは隆線によって文様が描かれるが、小破片のものが多く、モチーフは不明である。11・12は口縁部突起である。ともに口唇部は肥厚し、隆線による渦巻き文を有している。23・24は口縁部から体部にかけてのもので、炉の石組み部から出土したものである。口縁は平縁をなし、外反している。文様は、口縁部は無文で、体部には沈線と充填縄文による縦に展開したS字文を有している。

土製品は、土製円盤が4点出土した。26・27・29は全周を、28は一部を磨き、26～28は円形に、29は梢円形に作り出している。

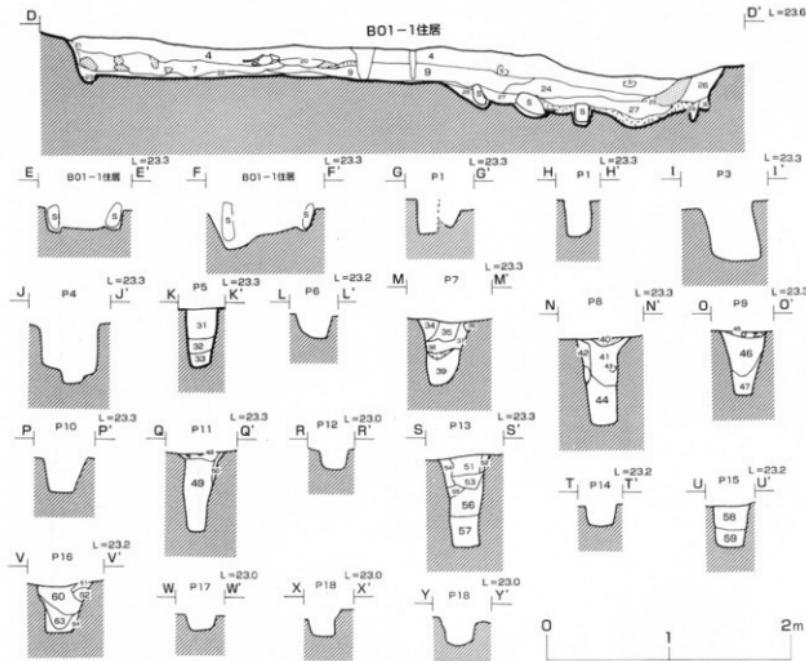
出土した石器は、石鎌2点・石匙1点・不定形石器4点・使用痕石器1点・凹石2点・磨石2点である。30・31は無茎の鎌である。基部は若干抉れ、鎌身は二等辺三角形状で、側縁は30では内弧、31では外弧である。32は、縱長の石匙である。つまみは欠損する。刃は、片面の3辺に作り出されている。33～36は不定形の石器である。33～35は片刃、35は両刃のもので、一辺にのみ直線的な刃を作り出している。37は使用痕石器である。曲線をえがく一辺にのみ剥離痕を有する。38・39は凹石である。38は断面が丸みを帯びた梢円形の礫、39は扁平な梢円形礫に凹を設けたもので、39では両面に2個の凹を有し、38では片面に2個の凹を有し、他の面にはやや広く作り出された凹を有している。40・41は磨石である。ともに梢円形状を呈し、全面研磨され、すべすべしている。

〔時期〕

炉内部の土器片より、縄文時代中期末の大木10式の時期に相当すると思われる。

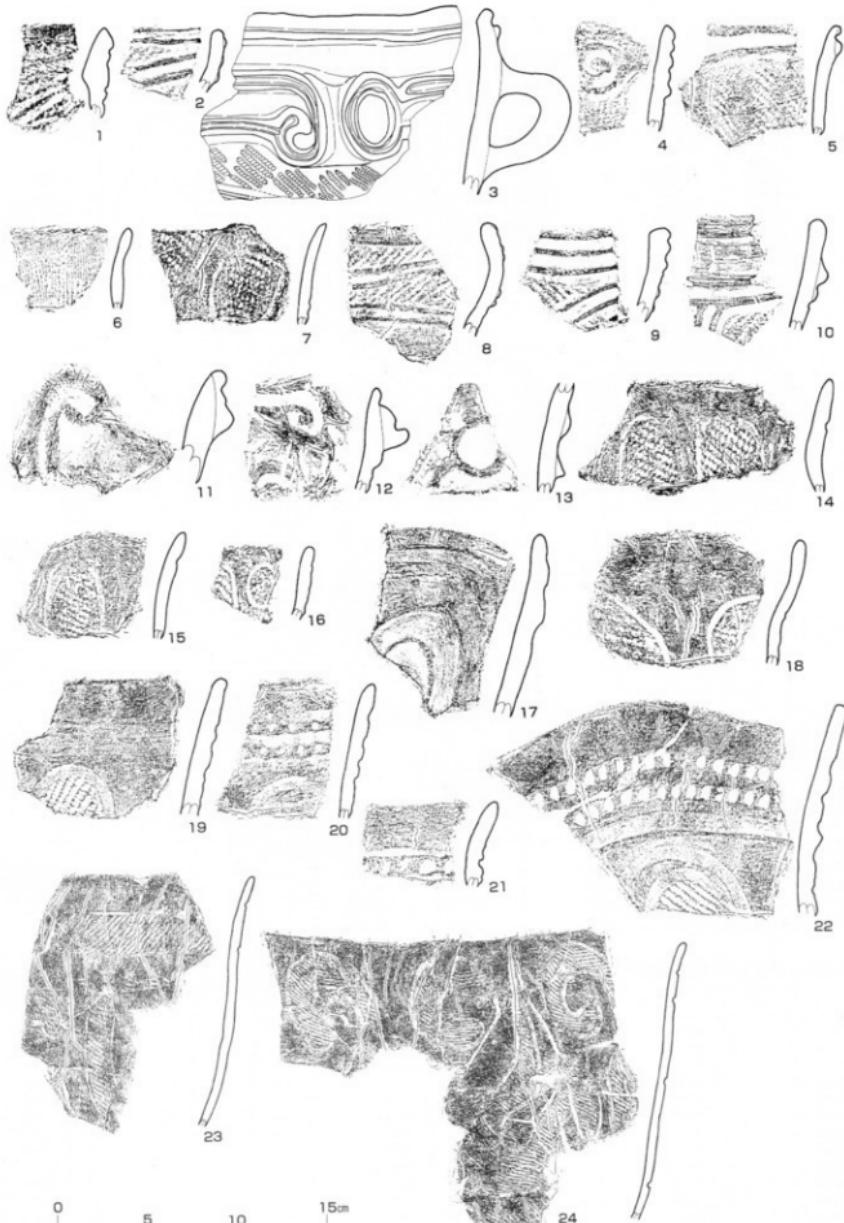


第6図 AO1-1住居、BO1-1住居

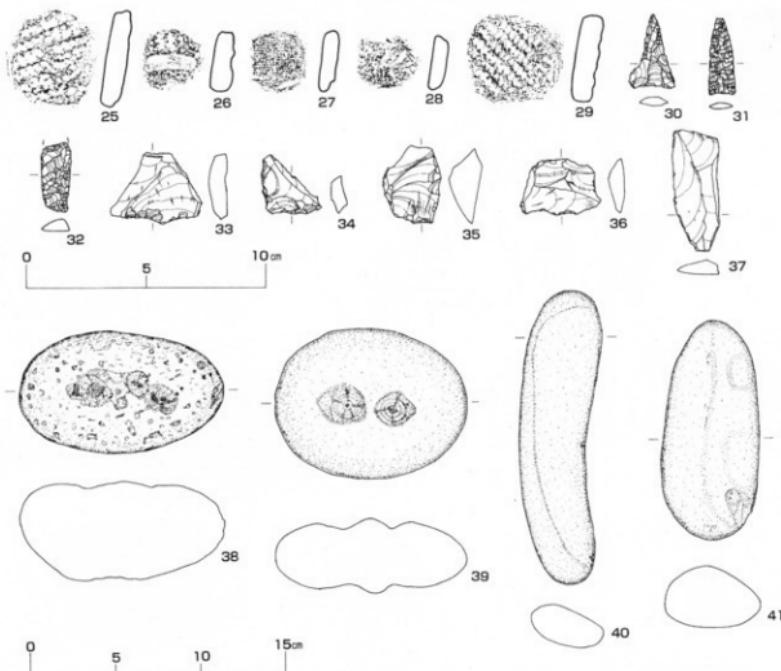


第7図 A01-1住居、B01-1住居

第2表 A01-1住居、B01-1住居



第8図 AO1-1住居、BO1-1住居出土遺物



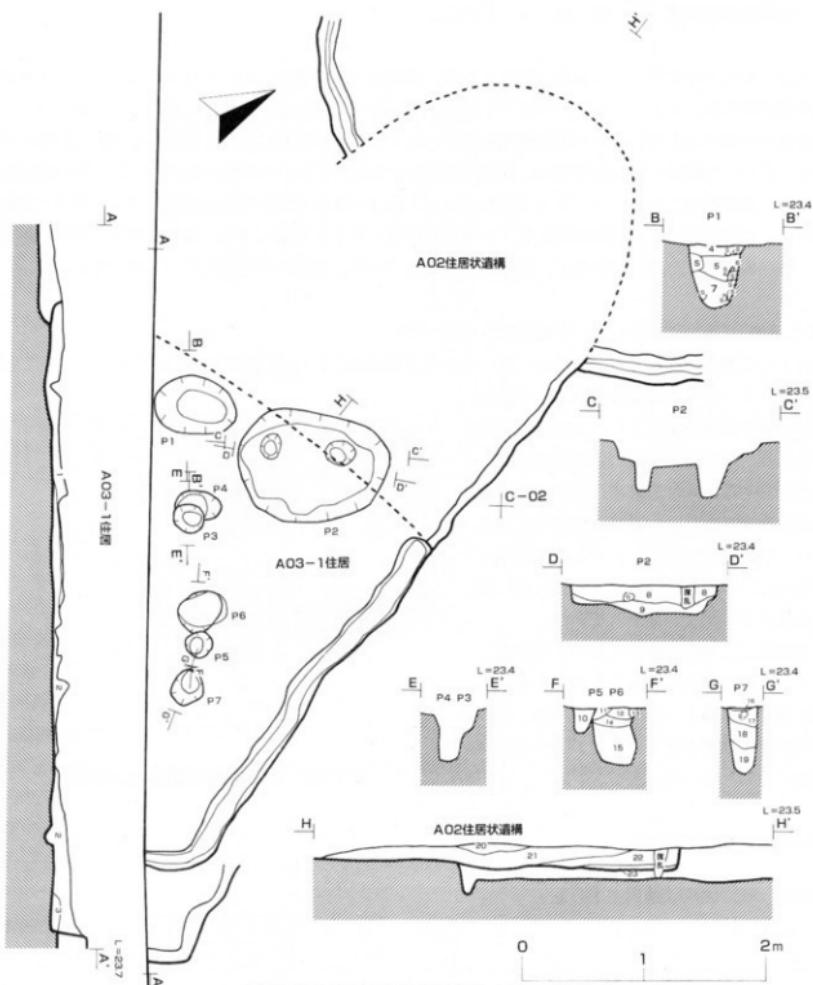
第9図 A01-1住居、B01-1住居出土遺物

第3表 A01-1住居、B01-1住居出土土製品

図版	遺構	器種	分類	高さ	幅	厚さ	重さ	備考	番号
第9図-24	A01-1住居	土製円盤		3.92	3.62	0.86	15.7		964
第9図-25	B01-1住居	土製円盤		2.58	2.52	0.98	7.15		963
第9図-26	B01-1住居	土製円盤		2.52	2.44	0.66	5.3		962
第9図-27	B01-1住居	土製円盤		2.47	2.60	0.7	4.6		963
第9図-28	B01-1住居	土製円盤		3.54	3.86	0.92	16.4		961

第4表 B01-1住居出土石器

図版	地点・層	器種	分類	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	登録
第9図-30	溝埋土	石礫		チート	3.08	1.92	0.42	1.6	9833
第9図-31	埋土中	石礫		粗粒砂岩	3.16	1.10	0.2	0.8	9832
第9図-32	埋土中	石礫		粗粒砂岩	2.28	1.62	0.44	2.1	9839
第9図-33	P14埋土	不定形石器		チート	3.42	2.96	0.62	7.6	9848
第9図-34	埋土中	不定形石器		珪質頁岩	3.12	1.9	0.62	3.5	9841
第9図-35	埋土中	不定形石器		粗粒砂岩	3.34	3.08	1.44	10.7	9857
第9図-36	埋土中	不定形石器		珪質頁岩	3.34	2.36	0.54	4.6	9840
第9図-37	埋土中	使用痕石器		珪質頁岩	5.12	2.34	0.9	9.3	9846
第9図-38	埋土中	凹石		溶結凝灰岩	12.1	7.11	6.03	685	10038
第9図-39	埋土中	凹石		粗粒砂岩	11.58	8.87	4.38	620	10039
第9図-40	埋土中	磨石		中粒砂岩	17.4	4.46	2.83	325	10035
第9図-41	埋土中	磨石		中粒砂岩	12.91	5.6	3.64	430	10036



第10図 A02住居状遺構、A03-1住居

第5表 A02住居状遺構、A03-1住居

層位	色調	土性	層位	色調	土性
1	10YR 3/4 増褐色	炭化物微量。焼土無し。遺物無し。粘性強い。やや柔らかい。	1.4	10YR 5/8 黄褐色	炭化物微量。燒土無し。遺物無し。粘性強い。柔らかい。
2	10YR 3/3 増褐色	炭化物微量。焼土無し。遺物無し。粘性強い。柔らかい。	1.5	10YR 4/6 褐色	炭化物微量。燒土無し。遺物無し。粘性強い。柔らかい。
3	10YR 4/4 黄褐色	炭化物微量。焼土無し。遺物無し。粘性強い。やや柔らかい。	1.6	10YR 3/4 増褐色	炭化物微量。燒土無し。遺物無し。粘性強い。柔らかい。
4	10YR 5/6 黄褐色	炭化物少量。焼土微量。遺物無し。粘性強い。柔らかい。	1.7	10YR 5/4 にい黄褐色	炭化物・焼土微量。遺物無し。粘性強い。柔らかい。
5	10YR 4/4 黄褐色	炭化物・焼土微量。遺物無し。粘性強い。柔らかい。	1.8	10YR 4/6 褐色	炭化物・焼土微量。遺物無し。粘性強い。柔らかい。
6	10YR 5/8 増褐色	炭化物・焼土無し。遺物無し。粘性強い。柔らかい。	1.9	10YR 5/6 にい黄褐色	炭化物・焼土微量。遺物無し。粘性強い。柔らかい。
7	10YR 3/4 増褐色	炭化物・焼土無し。遺物無し。粘性強い。柔らかい。	2.0	10YR 3/4 増褐色	炭化物微量。燒土無し。遺物無し。粘性弱い。やや柔らかい。
8	10YR 5/6 增褐色	炭化物・焼土無し。遺物無し。粘性強い。柔らかい。	2.1	10YR 4/4 褐色	炭化物・焼土微量。遺物無し。粘性弱い。やや柔らかい。
9	10YR 4/4 增褐色	炭化物・焼土無し。遺物無し。粘性強い。柔らかい。	2.2	10YR 3/4 増褐色	炭化物・焼土微量。遺物無し。粘性弱い。やや柔らかい。
10	10YR 4/6 增褐色	炭化物・焼土無し。遺物無し。粘性強い。柔らかい。	2.3	75YR 2/2 黑褐色	炭化物多し。焼土微量。遺物無し。粘性強い。柔らかい。
11	10YR 5/8 增褐色	炭化物・焼土無し。遺物無し。粘性強い。柔らかい。			
12	10YR 4/6 增褐色	炭化物・焼土無し。遺物無し。粘性強い。柔らかい。			
13	10YR 5/4 にい黄褐色	炭化物微量。焼土無し。遺物無し。強い。柔らかい。			

c、A02住居状遺構（第10図、第5表、写真図版1-6）

A02・A03・B02グリットの地山面において、東壁の一部を検出した。切り合は、A03-1住居に南側が切られ、A01-1住居・B01-1住居の埋土を切っている。形状は、A01-1住居・B01住居の埋土を掘り込んでいるため不明瞭であるが、セクションの観察により、橢円形を呈しているものと思われる。規模は、長軸は不明で、短軸は計測可能部分で2.8m、深さは10cmである。埋土は3層からなり、自然堆積である。セクション観察では、1層は暗褐色土で炭化物を微量に含み、焼土・遺物は無い。2層は褐色、3層は暗褐色で、ともに炭化物・焼土を微量に含み、遺物は無い。壁は、西壁の一部が検出されたのみであるが、急傾斜で外傾している。床面は平坦であるが、幾分柔い。

【出土遺物】（第11図、第6表、写真図版5-42~46）

出土した遺物は土器・石器がある。埋土中より土器片207（うち底部辺5点）が出土した。4点を図示した。1・2・4は深鉢の体部片である。

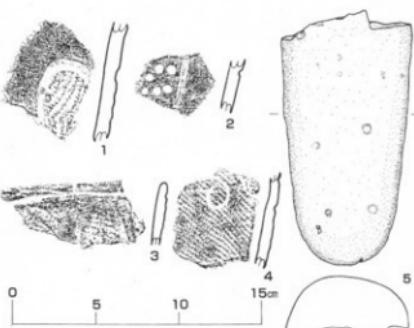
1は沈線と充填繩文により、2は沈線と刺突により、4は繩文原体の側面圧痕による文様を有する。3は深鉢の口縁部片である。口縁は平縁をなし、口縁部は内湾する。文様は、口縁部に口唇に平行する横位沈線を一条有し、体部には浅い沈線と擦り消し繩文によって区画文が描かれている。

石器は、石棒と思われるもの1点が出土した。5は石棒と思われるものである。欠損が著しく、極く一部分が残存する。表面は全体的に研磨されているが、若干自然面の凹凸を残している。

【時期】 時期は不明である。

第6表 A02住居状遺構出土石器

図 版	地 点・層	器種	分類	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	登録
第11図-5	埋土中	石棒		中粒砂岩	15.18	7.85	3.45	560	10034



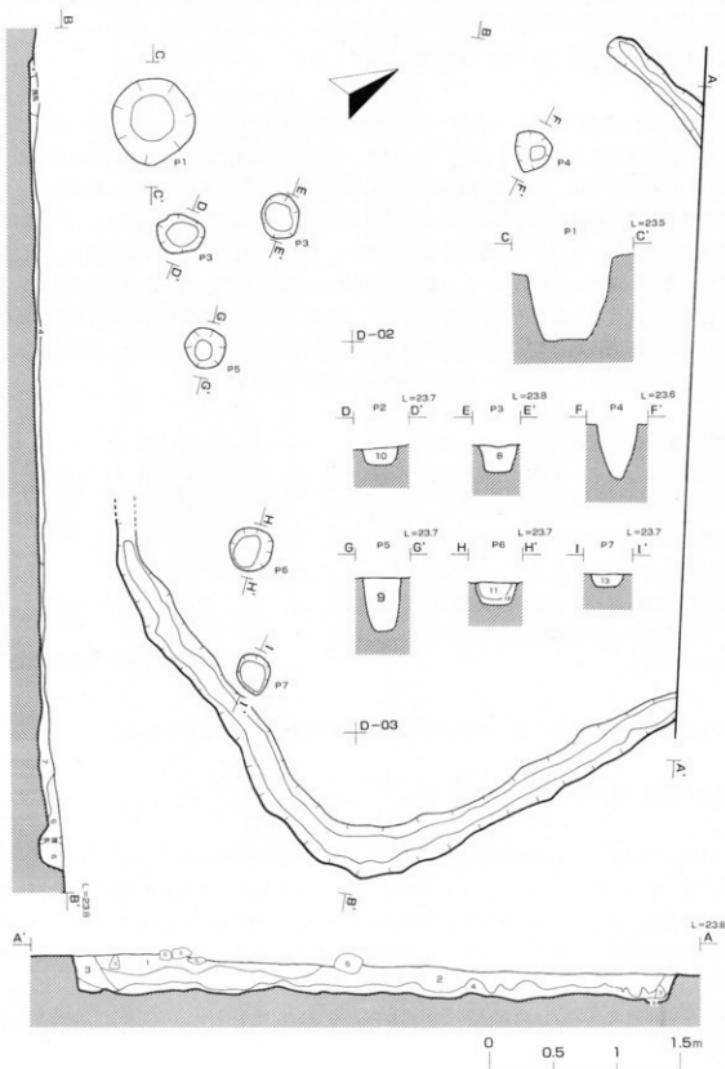
第11図 A02住居状遺構出土遺物

d、A03-1住居（第10図、第5表、写真図版1-6）

A03・A04グリットの地山面において、周溝及び壁の一部を検出した。切り合は、A02住居状遺構・A01-1住居を切る。形状は、残存する周溝と、セクション観察により、方形を呈しているものと思われる。規模は、A区西壁での最大幅は5.25mで、深さは22cmである。埋土は3層を確認したが、耕作による搅乱が著しい。セクションの観察では、1層・2層は暗褐色土で、炭化物を微量に含み、焼土・遺物は無く、1層は2層より若干固い。3層は、褐色で炭化物を微量に含み、焼土・遺物はみられない。溝は、北壁ではみられず、規模は幅22cm、深さは17cmである。壁は、急傾斜で外傾している。床面は、平坦で、幾分柔い。ピットは7基検出したが、埋土は自然堆積で、柱あたりはみられず、

主柱穴は不明である。また、A02住居状遺構に伴う可能性もある。P2はピット底面に小穴を有している。

【出土遺物】 出土遺物は土器がある。埋土中より土器片28点が出土したが、劣化が著しく割愛した。
【時期】 竪穴住居の形状から、平安時代の可能性があるが、遺物の出土が無く不明である。



第12図 D02-1住居

第7表 D02-1住居

層位	色調	土性	層位	色調	土性
1	10 YR 2 / 2 極暗褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性強い。柔い。	8	10 YR 3 / 4 暗褐色	炭化物・燒土・遺物無し。粘性強い。柔い。
2	75Y R 2 / 3 極暗褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性強い。やや柔い。	9	75Y R 2 / 3 極暗褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性強い。柔い。
3	75Y R 2 / 3 極暗褐色	炭化物・燒土微量。粘性強い。柔い。	10	10 YR 3 / 3 暗褐色	炭化物・燒土・遺物無し。粘性強い。柔い。
4	75Y R 3 / 3 黑褐色	炭化物・燒土・遺物無し。粘性強い。柔い。	11	10 YR 2 / 3 暗褐色	炭化物・燒土・遺物無し。粘性強い。柔い。
5	10 YR 3 / 3 暗褐色	炭化物・燒土微量。粘性強い。柔い。	12	10 YR 5 / 6 青褐色	炭化物・燒土・遺物無し。粘性強い。柔い。
6	10 YR 3 / 3 暗褐色	炭化物・燒土・遺物無し。粘性弱い。やや固い。	13	10 YR 3 / 3 暗褐色	炭化物・燒土・遺物無し。粘性弱い。やや固い。
7	10 YR 4 / 6 青褐色				

e、D02-1住居（第12図、第7表、写真図版1-7・8）

C01・C02・C03・D01・D02・D03グリットの地山面において検出した。耕作による搅乱が著しく、周溝によって竪穴住居であることを確認した。壁は、私道沿いの耕作の行われていない部分のセクションで確認したに過ぎない。形状は、隅丸方形を呈していると思われるが、西側に周溝が巡っていないため不明瞭である。規模は、北側周溝から西側周溝にかけて6.4mである。埋土は、北側の私道寄りの保存良好な部分では、色調から4層に分層が可能で、1層は黒色土、2層は極暗褐色土で、炭化物を微量に含み焼土・遺物は見られない。3層は極暗褐色土で、炭化物・焼土を微量に含んでいる。4層は黒褐色土で、炭化物・焼土・遺物は見られない。壁は、急傾斜で外傾している。床面は、幾分凹凸がみられ柔い。床面においてピット7基を検出したが、柱あたりを有するピットは無く、また、遺物がほとんど出土しないことから竪穴住居との関連は不明である。

〔出土遺物〕（第13図、写真図版5-47・48）

出土遺物は土器がある。土器は、埋土中より点、溝中より点の土器片が出土しており、うち、溝中よりのもの1点は、ロクロ未使用の土師の壺の底部破片（有段）であるが細片のため割愛した。2点を図示した。1・2は平縁深鉢の口縁部片である。口縁部は内湾している。文様は、1が隆沈線、2は隆線によるが、細片のためモチーフは不明である。

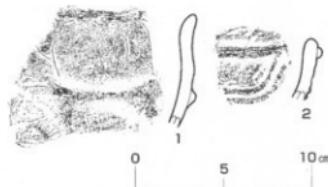
〔時期〕

溝中より出土した土師器と、竪穴住居の形状により奈良時代のものと思われる。

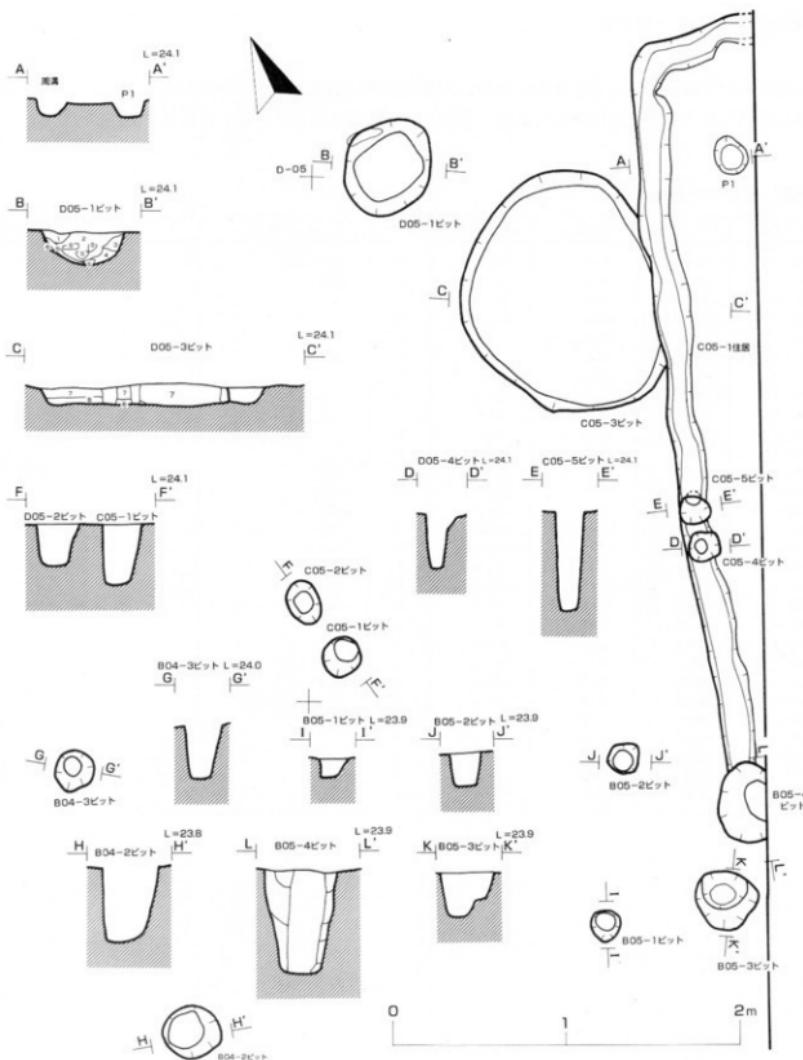
f、C05-1住居（第14図、写真図版2-1）

B05・C05・D05グリットの地山面において竪穴住居の西壁の一部を確認した。C05-3・B05-4・C05-4・C05-5ピットによって切られる。昭和58・59年度の発掘調査で確認した23号住居と同一のものである。平面形は方形を呈し、規模は東壁で5m、北壁で6.7mである。以下、詳細については「貝畠貝塚発掘調査報告概要」（注1）で報告済みであるので割愛する。同書を参照されたい。

注1 陸前高田市教委員会 「貝畠貝塚発掘調査報告概要」1985年3月 陸前高田市埋蔵文化財報告書第8集



第13図 D02-1住居出土遺物



第14図 C05-1住居

第8表 C05-1住居

層位	色 調	土 性	層位	色 調	土 性
1	T5Y R 3 / 3	暗褐色	1.0	10Y R 3 / 4	暗褐色
2	7SY R 2 / 3	褐暗褐色	1.1	10Y R 3 / 4	暗褐色
3	10Y R 3 / 4	暗褐色	1.2	10Y R 3 / 3	暗褐色
4	10Y R 5 / 6	黃褐色	1.3	10Y R 2 / 3	暗褐色
5	10Y R 5 / 6	黃褐色	1.4	10Y R 2 / 3	暗褐色
6	10Y R 5 / 6	黃褐色	1.5	7SY R 2 / 3	暗褐色
7	10Y R 3 / 4	暗褐色	1.6	10Y R 4 / 6	褐色
8	10Y R 4 / 6	褐色	1.7	10Y R 3 / 3	暗褐色
9	10Y R 3 / 3	暗褐色	1.8	10Y R 4 / 8	褐色

(2) ピット (第5図・第9表)

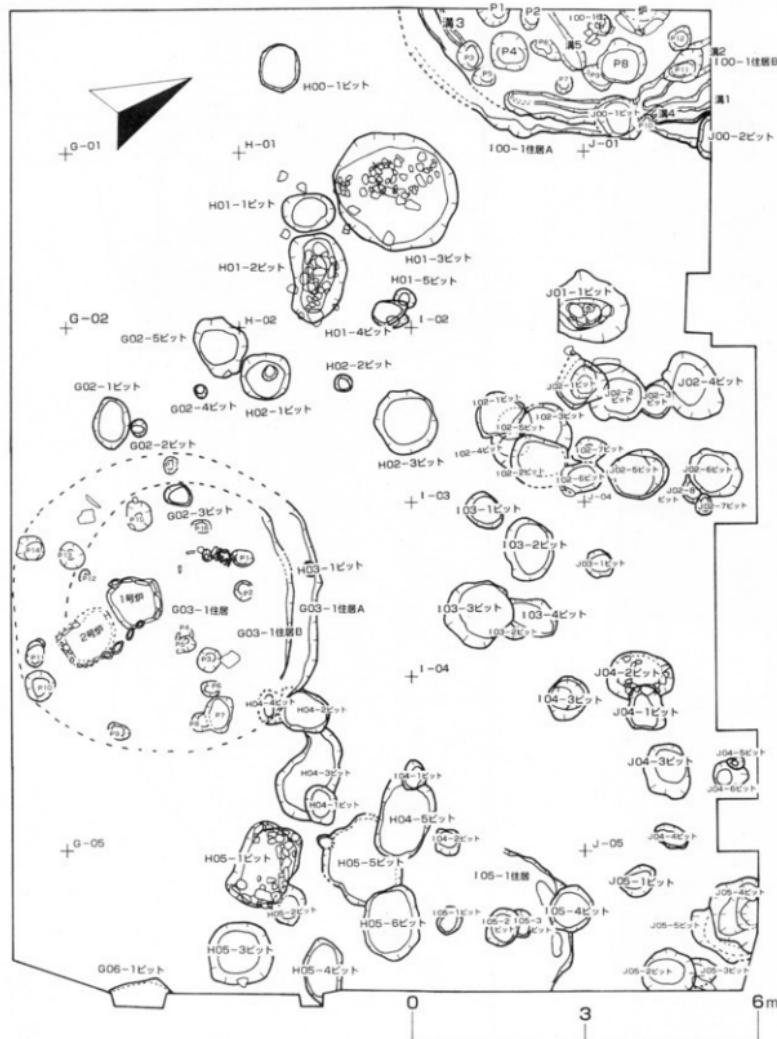
A区において29基のピットを検出したが、大部分は開口部径が20~40cmの小穴である。これらは規則的な配列も見られず性格は不明である。各ピットの規模は第9表に示した通りである。

第9表 ピット一覧表

ピット NO	平 面 形	開 口 部 径	底 部 径	深 度	出 土 遺 物	備 考
D05-1	楕円形	60×51	40×34	31	土器片25、石刃1	
C05-1	円形	21×20	14×13	34	土器片3	
C05-2	楕円形	26×19	11×11	23		
C05-3	楕円形	140×114	126×108	13		
C05-4	円形	19×17	8×7	31		C05-1住居を切る
C05-5	円形	19×16	9×8	53	土器片1	C05-1住居を切る
B05-1	円形	18×18	12×9	10		
B05-2	円形	20×18	13×11	19		
B05-3	円形	36×34	15×12	25		
B05-4	不明	46×29	23×11	59		
B04-1	円形	29×28	17×14	33		C05-1住居を切る
B04-2	円形	34×31	22×21	42		
B04-3	円形	24×22	11×9	31	土器片2	
A04-1	楕円形	42×34	24×19	22	土器片9	
A04-2	楕円形	142×62	131×49	32	土器片4	
A04-3	不定形	112×65	102×56	29	土器片4	
A05-1	円形	36×34	20×18	3	土器片23	
A05-2	不明	50×18	30×14	32	土器片1	
A05-3	楕円形	32×18	24×15	44	土器片3	
A05-4	楕円形	40×32	24×14	25		
A05-5	不明	105×81	68×56	30		
C00-1	円形	24×19	15×11	19		
C00-2	楕円形	36×29	18×16	31	土器片6	
C01-1	楕円形	32×26	18×13	23	復元土器1(粗製深鉢)	
C01-2	楕円形	43×41	31×23	27	すり石1	
D00-1	楕円形	29×23	24×14	35		
D00-2	楕円形	100×93	90×82	20	土器片31	D00-3ピットを切る
D00-3	不明	68×33	56×19	15	土器片3	D00-2ピットに切られる
B99-1	円形	39×31	27×16	43		

2 B区

B区において検出した遺構は、竪穴住居3棟・住居状遺構1棟ピット62基である。遺構の分布は、発掘区の西南部では遺構が見られないが、それ以外の箇所では、ほぼ全面に、密に広がっている。ピットはA区とは異なり、大型のものが多く見られるのが特徴である。

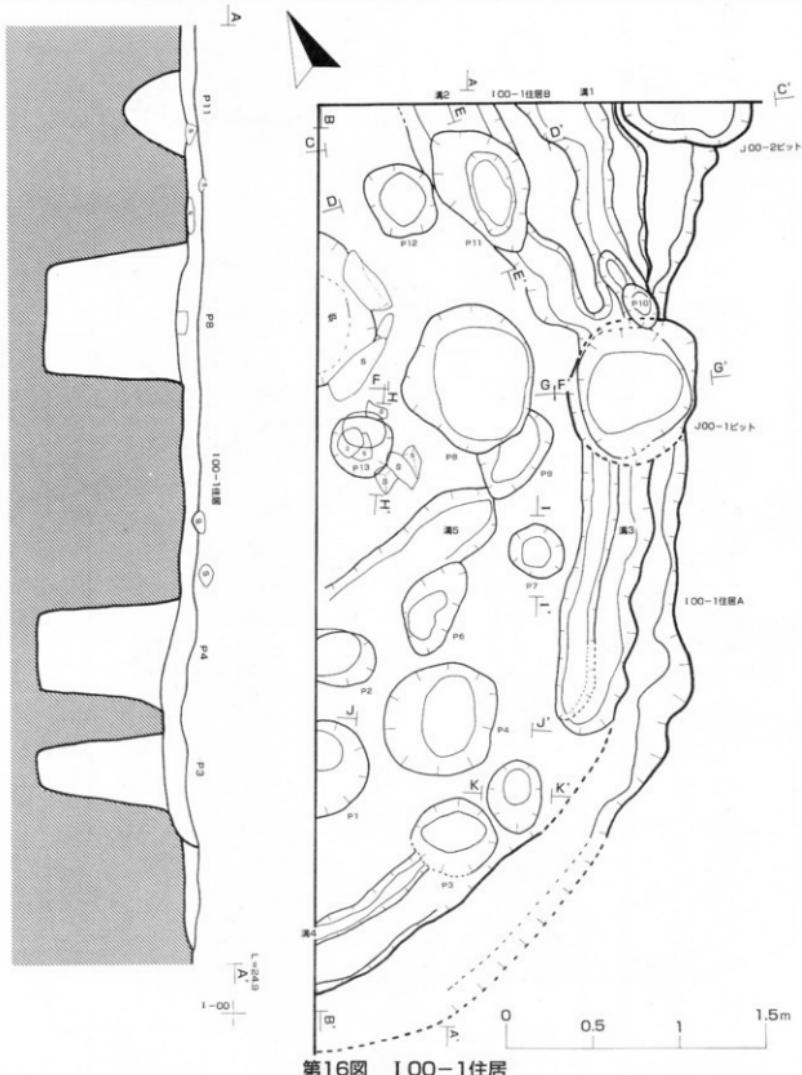


第15図 B区遺構配置図

(1) 縱穴住居

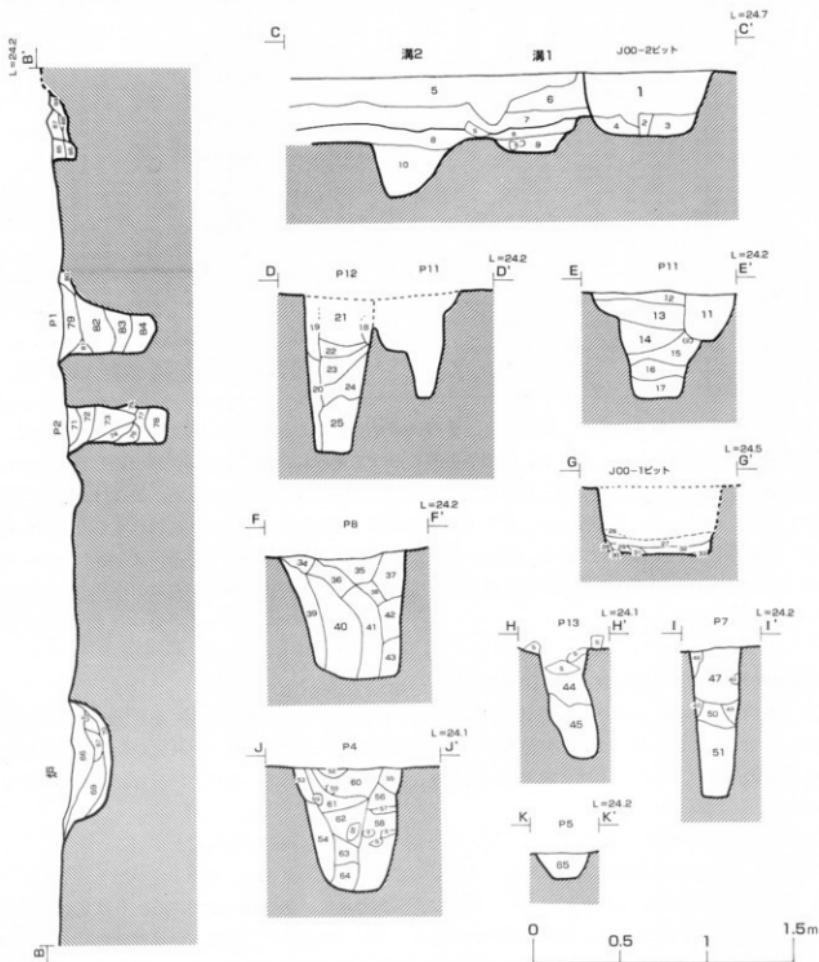
a、100-1住居（第16図、第17図、第10表、写真図版2-2・3）

B区北西隅のI 00・J 00グリットの地山面において全体の1/3程を暗褐色土の広がりとして検出した。残存部は未発掘区に広がる。検出された規模は、最大で、長軸（南北）5.14m・短軸（東西）



第16図 I OO-1住居

2. 24m・深さは地山面から0.11mであるが、数度の立て替えが行われている。形状は、円形あるいは橢円形と推定される。埋土は暗褐色土1層で、微量の炭化物が見られ、自然堆積である。壁は、東壁は外傾しながら立ち上がるが、南壁は明確には確認できなかった。溝跡は、5条見られる。溝1は北側の壁直下に見られ、幅20~50cm・深さ15cm程でJ00-1ピットに切られる。溝2は、幅30~50cm・深さ10~30cm程で、溝1と平行するように10~30cm程西側に見られ、P11・J00-1ピットに切られる。溝3は、J00-1ピットに北側が切られるが、東南側の壁直下において見られる。幅30~50cm・深さ10cm程で溝内にはこの溝を切る幅20cm・深さ17cm程の溝が見られる。溝4は、南壁直下に見られ、幅35~40cm、深さ10~20cm程で、溝3同様溝内に溝を切る幅11~16cm・深さ8~11cmの溝が見られる。



第17図 I OO-1住居

第10表 100-1住居

層位	色調	土 性	層位	色調	土 性
1	10YR 3/4 増褐色	炭化物微量。燒土無し。土器片有り。粘性弱い。やや固い。	4 4	10YR 3/4 増褐色	炭化物微量。燒土無し。土器片有り。粘性弱い。やや固い。
2	10YR 5/8 黄褐色	炭化物、燒土、遺物無し。粘性弱い。やや固い。	4 5	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。やや固い。
3	10YR 3/4 增褐色	炭化物、燒土。土器片有り。粘性弱い。やや固い。	4 6	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。やや固い。
4	7SYR 3/4 増褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。やや固い。	4 7	7SYR 2/2 黑褐色	炭化物少量。燒土、遺物無し。粘性弱い。やや柔い。
5	10YR 3/4 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。やや固い。	4 8	10YR 5/6 黄褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。やや柔い。
6	10YR 3/4 增褐色	炭化物無し。燒土無し。土器片有り。粘性弱い。やや固い。	4 9	10YR 2/2 黑褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。やや柔い。
7	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土無し。土器片有り。粘性弱い。やや固い。	5 0	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。やや柔い。
8	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土無し。土器片有り。粘性弱い。やや固い。	5 1	10YR 2/3 黑褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。やや柔い。
9	10YR 2/3 增褐色	炭化物微量。燒土無し。土器片有り。粘性弱い。やや固い。	5 2	10YR 2/2 黑褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。やや柔い。
10	10YR 2/3 增褐色	炭化物微量。燒土無し。土器片有り。粘性弱い。やや固い。	5 3	10YR 1/2 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。やや柔い。
11	10YR 2/3 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。やや柔い。	5 4	10YR 5/6 黄褐色	炭化物微量。燒土無し。粘性弱い。柔い。
12	7SYR 2/2 黑褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。やや柔い。	5 5	10YR 3/4 增褐色	炭化物微量。燒土無し。粘性弱い。柔い。
13	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。やや柔い。	5 6	10YR 4/4 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
14	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	5 7	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
15	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	5 8	10YR 5/8 黄褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
16	10YR 5/6 黄褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	5 9	10YR 4/4 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
17	10YR 4/4 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	6 0	10YR 4/4 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
18	10YR 5/ 黄褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	6 1	10YR 3/1 增褐色	炭化物微量。燒土無し。粘性弱い。柔い。
19	10YR 4/4 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	6 2	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土無し。粘性弱い。柔い。
20	10YR 4/4 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	6 3	10YR 3/2 增褐色	炭化物微量。燒土無し。粘性弱い。柔い。
21	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	6 4	10YR 3/2 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
22	10YR 4/4 尾褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	6 5	10YR 2/2 黑褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
23	10YR 3/2 黑褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	6 6	7SYR 2/3 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
24	10YR 3/2 黑褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	6 7	7SYR 2/3 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
25	10YR 2/2 黑褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	6 8	7SYR 2/3 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
26	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	6 9	7SYR 3/2 黑褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
27	10YR 4/4 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	7 0	7SYR 3/2 黑褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
28	10YR 4/6 尾褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	7 1	7SYR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
29	10YR 3/4 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	7 2	7SYR 3/4 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
30	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	7 3	10YR 4/4 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
31	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	7 4	10YR 5/6 黄褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
32	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	7 5	10YR 5/6 黄褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
33	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	7 6	10YR 5/8 黄褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
34	7SYR 2/3 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	7 7	10YR 5/8 黄褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
35	7SYR 2/3 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	7 8	10YR 5/6 黄褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
36	10YR 3/4 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	7 9	7SYR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
37	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	8 0	10YR 5/6 黄褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
38	10YR 2/2 黑褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	8 1	10YR 4/4 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
39	10YR 3/4 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	8 2	10YR 4/4 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
40	10YR 3/4 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	8 3	10YR 3/4 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
41	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	8 4	10YR 4/4 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
42	10YR 3/4 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	8 5	7SYR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
43	10YR 3/4 增褐色	炭化物微量。燒土・遺物無し。粘性弱い。柔い。	8 6	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土、遺物無し。粘性弱い。柔い。
			8 7	7SYR 2/3 增褐色	炭化物微量。燒土無し。粘性強い。柔い。
			8 8	10YR 5/8 黄褐色	炭化物微量。燒土無し。粘性強い。柔い。
			8 9	10YR 3/3 增褐色	炭化物微量。燒土無し。粘性強い。柔い。

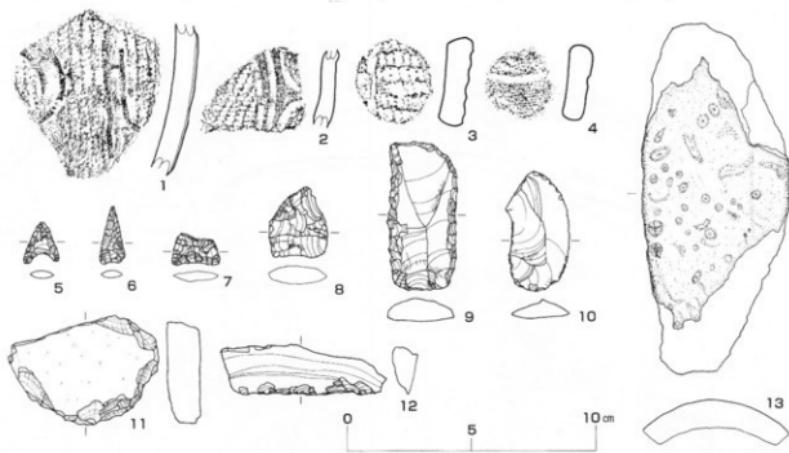
P 3・P 5によって切られるが、幅、深さ、溝内に溝を有することなどから考えて、溝3と溝4は一連の周溝であると思われる。溝5は、ほぼ中央部において見られ、幅40cm、深さ10cm程でP 6に切られる。床面は概ね平坦で、硬く締まる。ピットは床面において12基検出している。規模は、口径30~80cm、深さ90~11cmと一様ではない。P 7・P 12は口径、深さなどから主柱穴に相当すると考えられるが、配置等については不明である。炉は、北側の西壁より一部を検出している。大きさ40cm程の梢円碟2個と15cmほどの梢円碟1個が見られたが、主体部が未発掘区に広がっており、全体の形状等について不明である。

[出土遺物] (第18図、第11表、写真図版5-49~61)

出土遺物は、土器・土製品・石器がある。土器は、床面・ピット及び埋土から破片590点（うち底部13点）が出土しているが、ほとんどが埋土からの出土である。小破片が多く、2点を図示した。2点とも深鉢の体部片である。1は、縄文原体施文後に隆線を張り付ける。2は、隆沈線によって文様が描かれる。

土製品は、土製円盤が2点出土した。3、4とも一部を磨き、円形を作り出している。

石器は、石鎌3点、尖頭器1点、石匙1点、石刃2点、石製円盤1点、石棒1点が出土した。5、6、7は無茎鎌である。5は基部が抉れ、鎌身は正三角形状で、側縁は外弧である。6は基部が円基で、鎌身は二等辺三角形状で、側縁は直線的である。7は、基部がやや抉れ、側縁は外弧である。先端部が欠損する。8は、基部がやや抉れる尖頭器である。9は石匙である。柄は欠損する。長方形状を呈し、片面の3辺に刃が作りだされている。10、12は石刃である。10は、梢円形状を呈し、非常に



第18図 I 100-1住居出土遺物

1. 2. 13は

第11表 I 100-1住居出土石器

図 版	地 点・層	基 標	分 類	石 材	長さ	幅	厚さ	重 さ	登録
第18図-5	埋土中	石鏃		細粒砂岩	1.72	1.4	0.3	0.5	9721
第18図-6	埋土中	石鏃		珪質頁岩	2.3	1.05	0.26	0.6	9834
第18図-7	P 11埋土	石鏃		黒曜石	1.26	1.91	0.3	0.8	9725
第18図-8	埋土中	尖頭器		珪質頁岩	3.08	2.41	0.76	5.1	9732
第18図-9	JOO-1 埋土中	石鏃		珪質頁岩	5.99	2.78	1.12	22.5	9720
第18図-10	P 8 埋土中	不定形石器		珪質頁岩	4.72	2.48	0.88	8.7	9847
第18図-11	P 3 埋土中	不定形石器		細粒砂岩	6.0	3.86	1.34	44.6	9727
第18図-12	埋土中	石製円盤		花崗岩質岩	6.7	2.04	1.02	13.1	9849
第18図-13	埋土中	不定形石器		中粒砂岩	25.1	8.42	1.86	356	9853

細かな剥離が片面のほぼ全周に見られる。12は、長方形状を呈し、一辺にのみ直線状の刃が作り出されている。一部両面剥離が見られる。11は、石製円盤である。偏平な縁を打ち欠き円形に作りだしたものである。両面に自然面を大きく残す。1/3ほどが欠損している。12は、石棒の破片である。表面には細かな敲打痕がみられる。

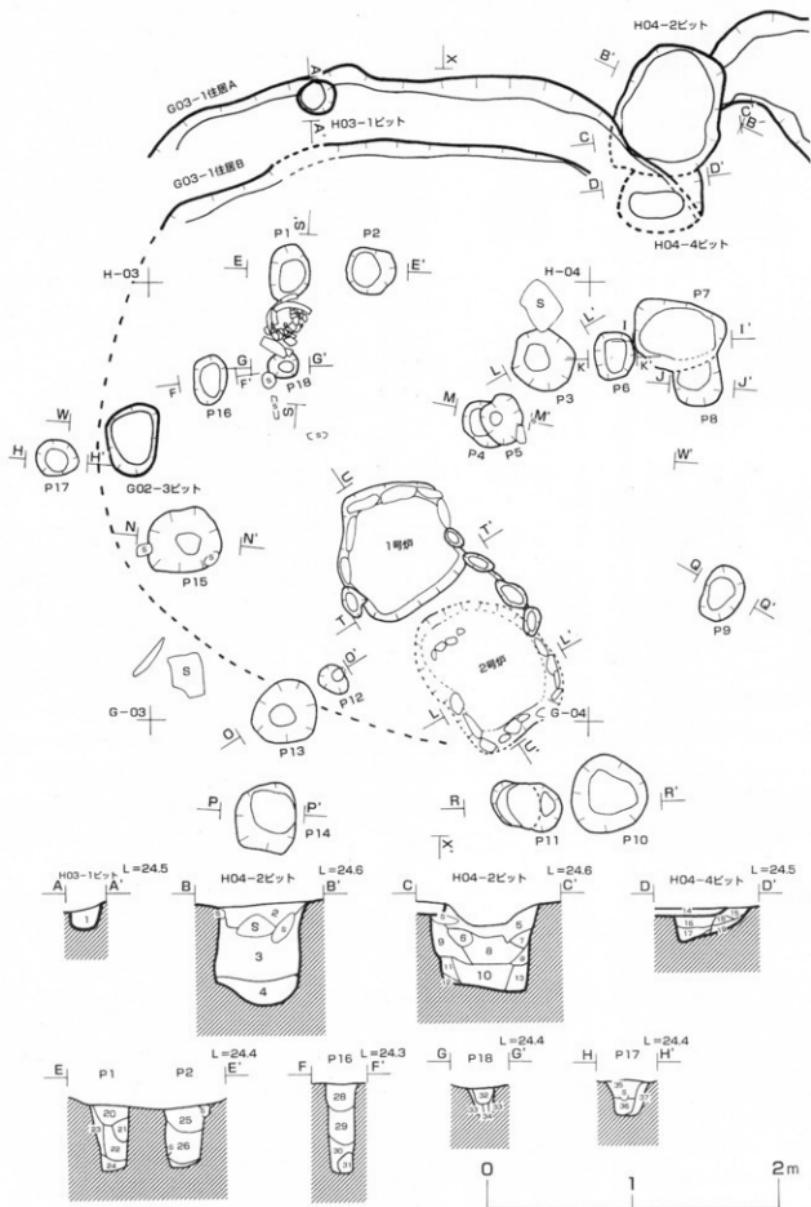
[時期]

床面からの出土遺物が少ないが、出土遺物から縄文時代中期末と考えられる。

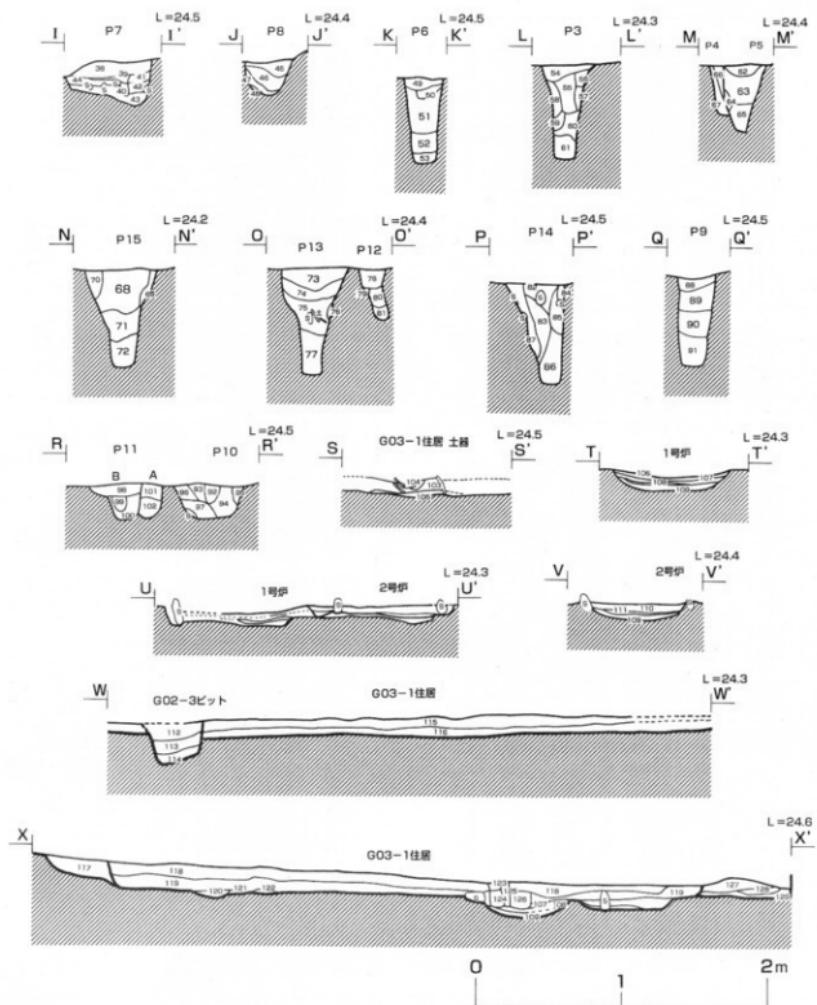
b、G03-1 住居（第19図、第20図、第12表、写真図版2-4）

B区中央部南側のG02・G03・H03・G04・H04の地山面において暗褐色土の広がりとして検出した。G03-1A住居、G03-1B住居の2棟が切り合っており、新旧関係は、G03-1B住居がG03-1A住居を切る。

G03-1A住居は、北壁の一部が残存するだけである。残存部からの推定では、直径4m前後の円形のプランを呈するものと考えられる。埋土は、硬く締まった褐色土が主体である。壁高は10cm程度で、やや緩やかに外傾する。床は、G03-1B住居によってほとんどが切られており不明であるが、ほぼ同レベルであり、わずかな残存部では、いくぶん凹凸があるが硬くしまる。炉は、ほぼ中央部において



第19図 G03-1住居



第20図 G03-1住居

長さ25cm前後の楕円礫を70×70cmの不整な円形に配した石囲炉（1号炉）を検出した。南側半分は、G03-1B住居に伴う石囲炉によって切られている。礫は6個残存しており、他の石は、G03-1B住居に伴う石囲炉を構築する際に抜き取られたと考えられる。そのため形状は不明である。内部には、厚さ1cm程の焼土層が見られる。時期は、出土遺物がなく詳細は不明である。

G03-1B住居は、G03-1A住居を切る。北壁の一部が残存するだけであるが、床の面的な広がりが確認できた。残存部からの推定では、長軸3mほどの楕円形あるいは、直径3mほどの円形のプランを呈すると考えられる。埋土は、2層に大別され、1層は小型の礫を含んだ暗褐色土で、やや柔らか

第12表 G03-1住居

い。2層は、1層同様やや柔らかい暗褐色土であり、礫は含まない。壁高は、20cm程で、外傾して立ち上がる。床は、概ね平坦で硬くしまる。ピットは、床面において18基検出されている。このうち柱穴状のものは、P3・P6・P9・P13・P14・P15であるが、配列等は不明である。また、北西側の壁よりの床面からは、下半部を欠く大木8b式の深鉢が伏せた状態で出土している。この深鉢の周辺には、長軸2m、短軸80cm程の不整な長梢円形の炭化物の広がりが見られた。炉は、南壁よりに5~20cmの円礫を70×60cmの不整な円形に配した石開炉があり、内部には、厚さ1cmほどの灰土層が見られる。

〔出土遺物〕(第21図、第13表、写真図版2-5・6、5-62~76)

出土遺物は、土器・土製品・石器がある。土器は、床面・ピット・埋土から破片590点（うち底部13点）が出土している。7点を図示した。1・2・3・4は、平縁をなす深鉢の口縁部片である。口



第21図 G03-1住居出土遺物

1~6、15は1、7は1

第13表 G03-1住居出土石器

図 版	地 点・層	器 標	分 類	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	登録
第21図-9	理土中	石鏃	珠質貝殻	2.12	1.20	0.3	0.5	9695	
第21図-10	理土中	石鏃	珠質貝殻	2.09	1.39	0.58	1.2	9698	
第21図-11	P I 理土	石鏃	珠質貝殻	5.86	2.00	0.66	7.05	9835	
第21図-12	理土中	不定形石器	珠質貝殻	6.46	4.18	0.67	15.7	9731	
第21図-13	理土中	不定形石器	粗粒砂岩	4.5	2.62	6.4	6.8	9730	
第21図-14	床面	不定形石器	珠質貝殻	2.59	1.28	0.72	2.3	9701	
第21図-15	理土	石刀	粗粒砂岩	33.6	4.72	1.44	350	9711	

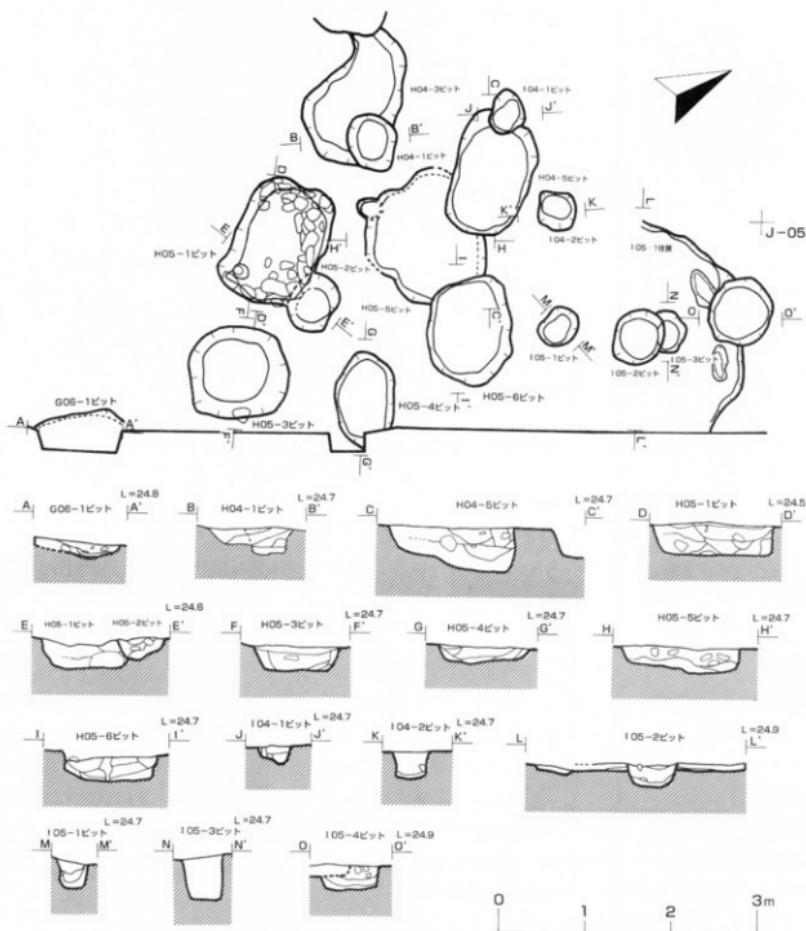
縁部は、すべて内湾する。文様は、1・2・3は口縁に平行する2条の隆線を有し、1では原体施文後に隆線を張り付け、3は原体施文後に2条の隆線による渦巻き文が意匠される。4は隆沈線と沈線により文様が描かれるが、小破片のためモチーフは不明である。5・6は、深鉢の体部片である。5は沈線による区画文を有し、6は原体施文後に隆沈線によって文様が描かれる。7は、床面から出土した土器で、体部下半と底部を欠く胴張りの深鉢である。口縁は平縁をなし、内湾している。文様は、口縁部に隆沈線によって区画された口縁部文様帯を有し、文様帯内には4箇所に渦巻文が描かれる。体部は、隆沈線による渦巻文が描かれ、縦位の隆沈線との連繋部には、小渦巻文が見られる。

土製品は、土製円盤が1点出土した。8は、全周を打ち欠き、円形に作り出している。

石器は、石鏃2点、石匙1点、不定型石器3点、石刀1点が出土した。9・10は、無茎鏃である。9は、凹基で、鏃身は二等辺三角形状を呈し、側縁は直線的である。10は、平基で、鏃身は二等辺三角形状を呈し、側縁は外弧である。11は、縦長の石匙である。刃は両刃で全周に見られる。12・13

・14は不定型石器である。12は、両刃で2辺に刃を作り出している。13は、片刃で、1辺にのみ直線的な刃を作り出している。14は、両極に打撃痕を有する。15は、石刀である。基部には、両面穿孔による穿孔を1個有する。形状は先端部に行くにしたがって幅広くなる。全体に擦痕が見られ、丁寧に研磨されている。

〔時期〕 床面からの出土遺物から、縄文時代中期中葉と考えられる。



第22図 I05住居状遺構、G06、H04、H05、I04、I05ピット群

C、I 05住居状遺構（第22図）

I 05グリットの地表面において、北壁の一部と溝を検出した。切り合は、I 05-4 ピットによって切られる。形状は、不明である。規模は、計測可能部分で2.5mを測り、深さは9cmである。埋土は2層からなり、1層はにぶい黄褐色土、2層は暗褐色土で、炭化物・焼土・遺物は含まない。溝は2条検出したが、規模は、40cm×18cm、50cm×25cmと短い。壁は外傾する。時期は、出土遺物が無く不明である。

(2)ピット

B区において検出したピットは62基である。A区と比較すると、大型のピットが多く見られ、分布も I 02・J 02グリットのように密集している箇所も見られる。

a、G06、H04、H05、I04、I05ピット群（第19図、第22図、第14表、写真図版3-3）

B区東側において17基を検出した。H04、05グリッドにおいて開口部径が1mを越える大型のピットが7基集中して見られる。深さは、19~50cmを測る。底部壁側を全周するように集石が見られる。H05-1ピット、橢円形を呈するH04-5、H05-4ピットは、出土遺物などからは性格は不明であるが、墓坑の可能性も考えられる。各ピットの詳細については、第14表に示した。表の出土遺物の()は、復元土器の数を示す。以下、主な出土遺物について触れる。

第14表 G06、H04、H05、I04、I05ピット群一覧表

ピットNO	平面形	開口部径	底部径	深さ	出土遺物	備考
G06-1	不明	不明	不明	47	土器片27、土器片44(10)、 ナイフ片8、須恵器9	未調査区へ広がる
H04-1	橢円形	72×58	49×35	31	土器片52、石器1	H04-3ピットを切る
H04-2	橢円形	92×56	78×52	67	土器片44、須恵器1品	G03-A住居、H04-3ピットを切る
H04-3	不定形	162×64	129×52	28		H04-1、2ピットに切られる
H04-5	橢円形	132×83	120×76	50		H05-5ピットを切り、I04-1ピットに切られる
H05-1	不定形	150×100	134×87	38	土器片26	集石あり、H05-2ピットに切られる
H05-2	不定形	69×51	41×36	26		H05-1ピットを切る
H05-3	円形	123×120	83×77	29	土器片70、石刀1、土器片12 5(1)、須恵器20(1、墨書き1)	
H05-4	橢円形	105×69	90×56	19	土器片16、土器1	未調査区へ広がる
H05-5	不定形	157×143	142×120	28	土器片44、土器蓋片6	H04-5ピットとH05-6ピットに切られる
H05-6	橢円形	126×97	105×80	28	土器片45、土製円盤1、土器 片3	H05-5ピットを切る
I04-1	不定形	53×37	39×23	21	土器片4、土器片2	H04-5ピットを切る
I04-2	不定形	53×49	35×25	32	土器片6、石刀1	
I05-1	円形	49×39	35×22	32	土器片3	
I05-2	円形	70×60	48×44	31	土器片8、土器片2	I05-3ピットを切る
I05-3	不定形	49×42	34×25	53	土器片3	I05-2ピットに切られる
I05-4	円形	80×78	63×58	30	土器片18	I05住居状遺構を切る

G06-1ピット（第24図14~23、第17表、写真図版3-5・6、6-90~95）

土師器10点を図示した。14は高台付壺、15~23は壺である。すべてロクロ成形で、内面は黒色処理が見られる。底部は15、17、19、20、21、22が回転糸糸切、16、18、23が静止ヘラ切である。18、21は、外面下部にヘラケズリが見られ、23は外面にヘラミガキ、黒色処理が見られる。22は外面下部に不明であるが墨書きが見られる。

H04-1 ピット（第23図1～3、9、第16表、写真図版5-77～79・85）

土器3点、石器1点を図示した。1、2は深鉢の口縁部片、3は体部片である。1は沈線と刺突により、2は隆線による渦巻き文を有する。3は原体施文後に隆帯によって文様が描かれる。9は縦型の石匙である。刃は両刃であるが右側縁部において顕著に見られる。

H04-2 ピット（第23図13、第15表、写真図版3-4、6-89）

斧状土製品1点が出土した。先端部のみが残る欠損品である。体部には原体が施され、先端部は無文で、斧の刃先状に成形されている。

H05-3 ピット（第23図11、第24図24～26、第16表、第17表、写真図版6-87・96～98）

石器1点、土師器1点、須恵器2点を図示した。11は不定形石器である。刃は片刃で、一辺にのみ直線的に作り出している。24は土師器、25、26は須恵器の坏である。24はロクロを使用し、下部にヘラケズリが見られる。内面はヘラミガキ、黒色処理が見られる。底面は回転糸切である。25は底面が回転糸切、26は底部を欠損する墨書きの須恵器である。

H05-4 ピット（第23図7、12、第15表、写真図版6-83・88）

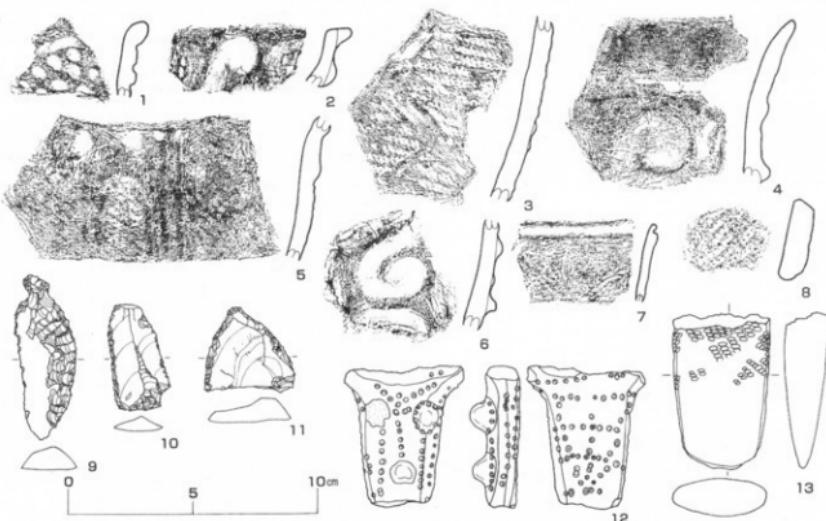
土器1点、土製品1点を図示した。7は深鉢の口縁部片である口唇部に沈線を有する。12は肩部から胸部にかけての土偶である。胸部右側の突起を欠くが、胸部、胸部に突起の貼付が見られる。

H05-6 ピット（第23図4～6、8、第15表、写真図版3-7、5-80～82、6-84）

土器3点、土製品1点を図示した。4は深鉢の口縁部片、5、6は体部片である。4は平縁をなす口縁部片で、隆沈線による渦巻き文を有する。5は沈線による梢円区画文を有し、6は隆線による渦巻き文を有する。8は、全周を打ち欠き、円形に作り出した土製円盤である。

I04-2 ピット（第23図10、第16表、写真図版6-86）

不定形石器1点を図示した。刃は片刃で、2辺に直線的な刃を作り出している。



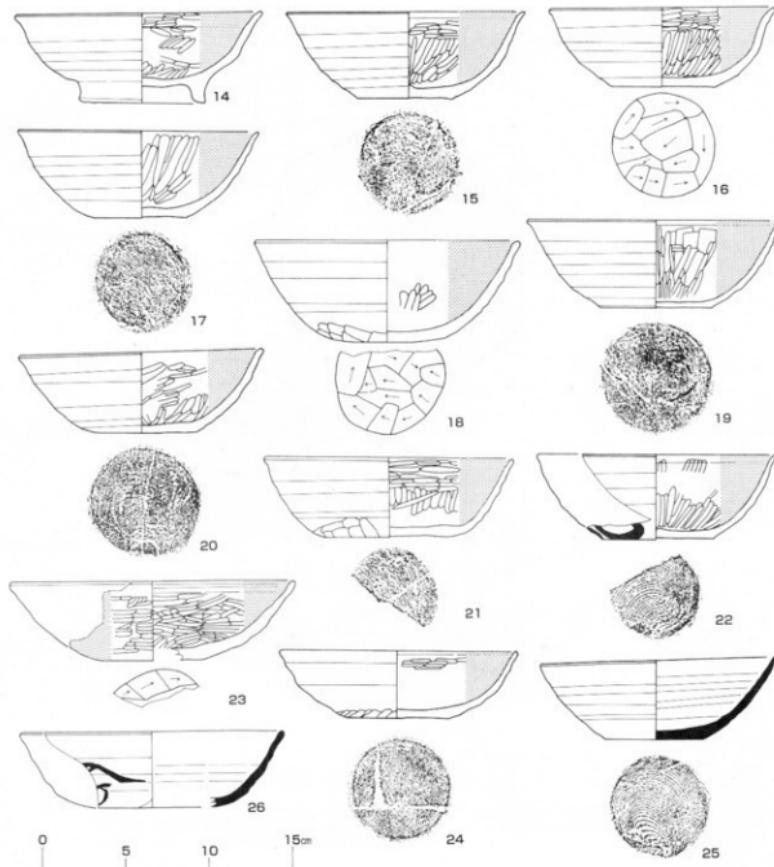
第23図 H04、H05、I04、I05ピット群出土遺物

第15表 H05-6ピット出土土製品

図版	遺構	器種	高さ	幅	厚さ	重さ	備考	登録
第23図-13 写真図版 6-89	H04-2ピット	矛状土製品	6.13	3.9	1.75	40.6		972
第23図-12 写真図版 6-88	H05-4ピット	土偶	5.7	4.77	1.77	32.9		968
第23図-8 写真図版 6-84	H05-6ピット	土製円盤	3.26	3.14	0.98	12.3		976

第16表 H04-1、H05-3、I04-2ピット出土石器

図版	遺構	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	登録
第23図-9 写真図版 6-85	H04-1ピット	石匙	珪質頁岩	6.64	2.34	0.9	12.5	9723
第23図-10 写真図版 6-86	H04-2ピット	不定形石器	珪質頁岩	4.22	2.20	0.84	6.0	9728
第23図-11 写真図版 6-87	H05-3ピット	不定形石器	珪質頁岩	3.66	3.66	1.06	11.0	9686

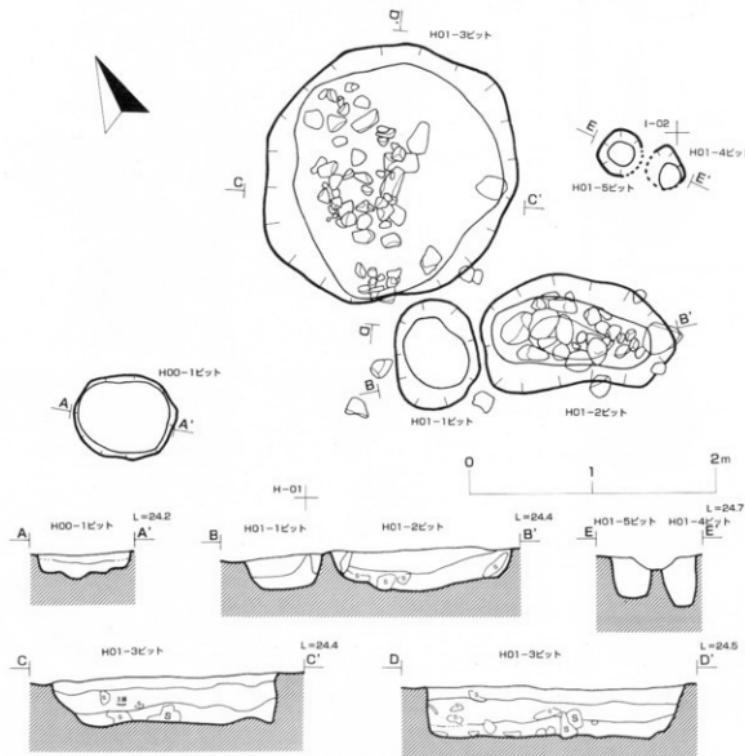


第24図 G06-1、H05-3ピット出土遺物

第17表 G06-1、H05-3ピット出土土器器、須恵器

図版	通 標	器 種	外 面 調 整	内 面 調 整	底 部 切 線 形 体	備 考	登 錄
第24図-14 写真図版 6-90	G06-1ピット	高台村环(土器)	ロクロ	ヘラミガキ、黒色處理			330
第24図-15 写真図版 6-91	G06-1ピット	环(土器器)	ロクロ	ヘラミガキ、黒色處理	回転丸切		331
第24図-16 写真図版 6-92	G06-1ピット	环(土器器)	ロクロ	ヘラミガキ、黒色處理	静止へき切		332
第24図-17 写真図版 6-93	G06-1ピット	环(土器器)	ロクロ	ヘラミガキ、黒色處理	回転丸切		333
第24図-18	G06-1ピット	环(土器器)	ロクロ、下部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色處理	静止へき切		334
第24図-19 写真図版 6-94	G06-1ピット	环(土器器)	ロクロ	ヘラミガキ、黒色處理	回転丸切		335
第24図-20 写真図版 6-95	G06-1ピット	环(土器器)	ロクロ	ヘラミガキ、黒色處理	回転丸切		336
第24図-21	G06-1ピット	环(土器器)	ロクロ	ヘラミガキ、黒色處理	回転丸切		337
第24図-22	G06-1ピット	环(土器器)	ロクロ	ヘラミガキ、黒色處理	回転丸切	墨書きあり	340
第24図-23	G06-1ピット	环(土器器)	ロクロ	ヘラミガキ、黒色處理	静止へき切		343
第24図-24 写真図版 6-96	H05-3ピット	环(土器器)	ロクロ、下部ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色處理	回転へき切		338
第24図-25 写真図版 6-97	H05-3ピット	环(須恵器)	ロクロ	ロクロ	回転丸切		339
第24図-26 写真図版 6-98	H05-3ピット	环(須恵器)	ロクロ	ロクロ	底部穴掘	墨書きあり	344

b、H00、H01ピット群 (第25図・第18表)



第25図 H00、H01ピット群

第18表 H00、H01ピット群一覧表

ピットNO	平面形	開口部径	底部径	深さ	出土遺物	備考
H00-1	橢円形	84×67	75×61	19	土器片19	
H01-1	橢円形	91×67	57×52	27	土器片60、土製円盤2、土鉢片7 須恵片1	
H01-2	不定形	161×91	133×56	34	土器片17、土鉢片17、須恵片集石あり	
H01-3	橢円形	134×124	127×103	26	土器片70、土錐1、石器1、集石あり	
H01-4	橢円形	36×33	23×18	42	土鉢片43(2)、須恵片13	
H01-5	円形	38×36	22×19	32	土器片8、土鉢片2	

B区西側において6基検出した。開口部径が1mを越える大型のピットは、H01-2、3ピットの2基で、いずれも内部に集石が見られるが性格は不明である。

H01-1ピット（第26図2～4、第19表、写真図版6-100～102）

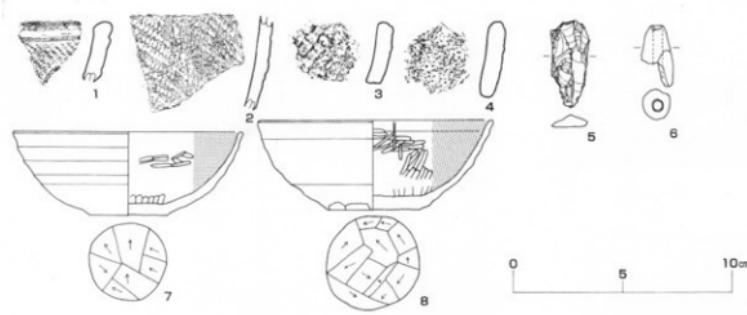
土器片1点、土製円盤2点を図示した。2は深鉢の体部片である。縄文原体の側面圧痕が見られる。3、4は全周を打ち欠き、円形に作り出した土製円盤である。

H01-2ピット（第26図1、写真図版6-99）

ピット底部には10～30cm大の礫の集石が見られる。深鉢の口縁部片1点を図示した。口縁に平行する隆線を有し、原体施文後に隆線を貼り付ける。

H01-3ピット（第26図5～8、第19表、第20表、第21表、写真図版3-1、6-103～104）

ピット底部の中心部付近を中心に10～30cm大の礫の集石が見られる。土錐1点、石器1点、土師器2点を図示した。5は土錐である。約2分の1が残る欠損品である。長軸方向に穿孔が見られる。6は不定形石器である。7、8は土師器の壊である。外面調整はロクロを使用し、内面はヘラミガキ、黒色処理が見られる。底面は静止切りである。8は外面下部にヘラケズリが見られる。



- 第26図 H01ピット群出土遺物 -

第19表 H01-1、3ピット出土土製品

図版	通 横	器種	高さ	幅	厚さ	重さ	備 考	登録
第26図-3 写真図版6-101	H01-1ピット	土製円盤	3.33	2.86	0.66	7.2		974
第26図-4 写真図版6-102	H01-1ピット	土製円盤	3.16	3.34	0.8	8.65		977
第26図-6 写真図版6-104	H01-3ピット	土錐	2.75	1.48	1.44	3.6		970

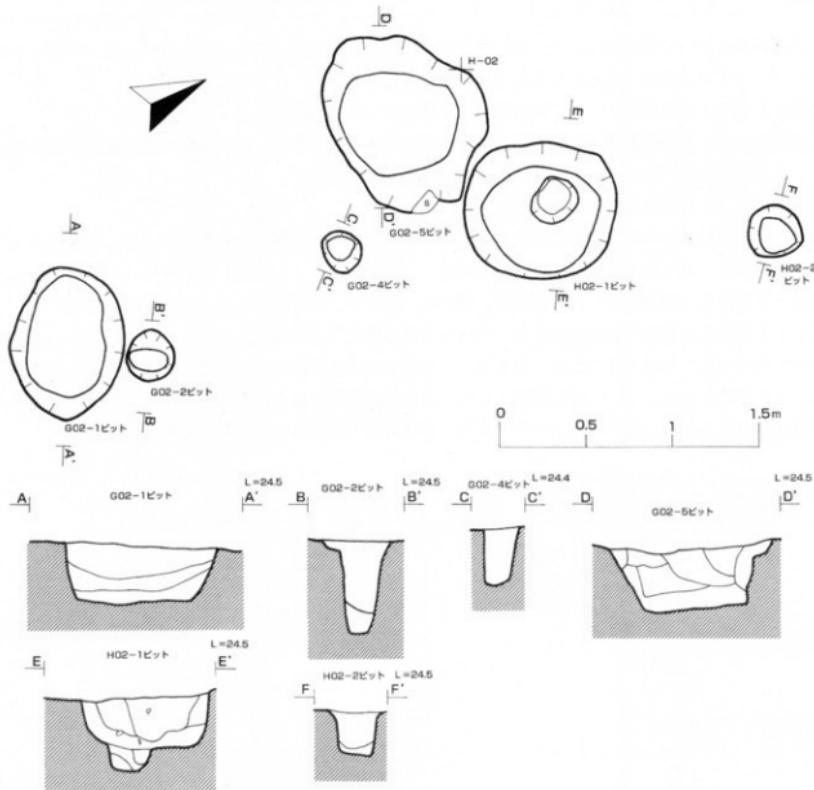
第20表 H01-3ピット出土石器

図版	通 横	器種	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	登録
第26図-5 写真図版6-103	H01-3ピット	不定形石器	珪質頁岩	3.97	1.77	0.68	3.8	10033

第21表 H01-3ピット出土土師器

図版	遺構	器種	外面調整	内部調整	底部切離形体	備考	登録
第26図-7	H01-3ピット	环(土師器)	ロクロ	ヘラミガキ、黒色処理	春止ヘラ切		341
第26図-8	H01-3ピット	环(土師器)	ロクロ、下部ヘタケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	春止ヘラ切		342

C、G02、H02ピット群(第27図、第22表)



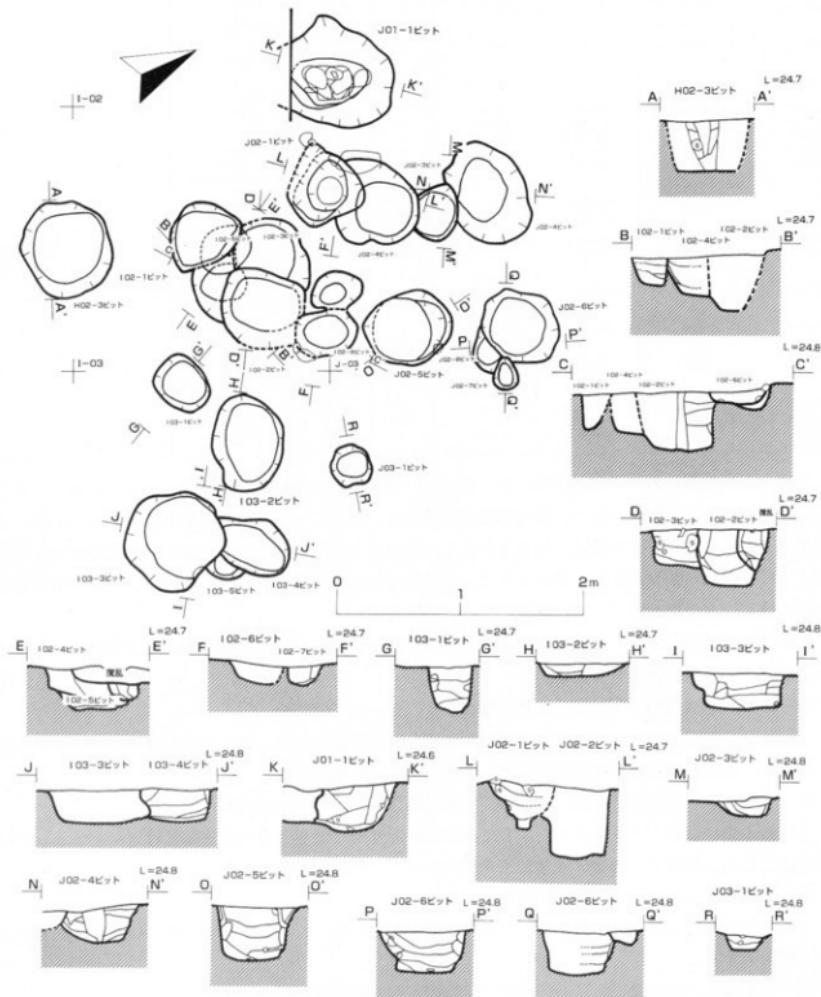
第27図 G02、H02ピット群

第22表 G02、H02ピット群一覧表

ピットNO	平面形	開口面径	底面径	厚さ	出土遺物	備考
G02-1	橢円形	88×65	72×43	32	土器片8、土器片1	
G02-2	円形	30×28	24×13	55	土器片1	
G02-4	円形	25×16	23×15	33		
G02-5	不定形	114×87	69×67	35	土器片13	
H02-1	円形	88×86	21×19	42	土器片47	
H02-2	円形	33×31	23×20	21	土器片6	

B区中央部南側において6基検出した。開口部径は25~114cmで、深さは21~55cmを測り、円形のピットが多い。G02-5ピットとH02-1ピットは、隣接するように検出されているが、全体的には密度は低い。遺物はG02-4ピットを除くすべてのピットから、土器片が出土している。最も出土数の多いH02-1ピットで45点である。これらは、すべて細片であるため割愛した。

d、H02、I02、I03、J01、J02、J03ピット群（第28、29図、第23、24、25表、写真図版2-8）



第28図 H02、I02、I03、J01、J02、J03ピット群

第23表 H02、I02、I03、J01、J02、J03ピット群一覧表

ピットNO	平面形	開口部径	底 部 径	深さ	出 土 通 物	備 考
H02-3	円形	110×99	89×80	52	土器片64、渦巻片1	
I02-1	不定形	85×73	68×62	31	土器片3	
I02-2	不定形	108×87	80×58	68	102-3、4、5ピットを切る 土器片118	
I02-3	不定形	92×62	71×52	41	102-3、4ピットを切り、102-6 ピットに切られる 土器片17、石礫1	
I02-4	不定形	80×77	56×42	43	102-3、5ピットを切り、102-1 2ピットに切られる 土器片7	
I02-5	不定形	不明	不明	不明	102-3ピットを切り、102-1、4 ピットに切られる 土器片7	
I02-6	橢円形	70×51	52×37	23	土器片10 102-2、7ピットを切る 102-6ピットに切られる	
I02-7	不定形	65×44	39×35	23	土器片58	
I03-1	橢円形	69×55	51×45	52	土器片24	
I03-2	橢円形	106×96	86×69	15	土器片26、土鈎片4、渦巻片5	
I03-3	不定形	121×116	95×94	41	土器片61、土製円盤1、石棒1	
I03-4	不定形	80×64	75×41	37	103-5ピットを切り、103-3ピッ トに切られる	
I03-5	不定形	45×23	26×19	34	103-3、4ピットに切られる	
J01-1	不定形	135×120	57×37	53	土器片58	
J02-1	不定形	88×82	33×31	50	一般亂	
J02-2	不定形	99×83	70×60	80	102-2ピットを切る 土器片26、石刀2、石礫1	
J02-3	橢円形	66×54	52×47	18	102-3ピットを切られる 土器片2、土鈎片2	
J02-4	不定形	125×90	72×58	40	102-4ピットを切り、J02-2ピッ トに切られる 土器片66	
J02-5	橢円形	99×84	75×69	62	J02-3ピットに切られる 土器片33、土鈎片1	
J02-6	円形	92×83	69×62	52	土器片27 J02-8ピットを切り、J02-7ピッ トに切られる	
J02-7	橢円形	31×30	27×18	20	J02-6、8ピットを切る	
J02-8	不定形	58×33	29×24	20	J02-6、7ピットに切られる	
J03-1	円形	49×45	36×29	25	土器片26	

B区中央部北側において23基検出した。切り合ひ関係の認められない単独のピットは6基で、その他はすべて切り合ひ関係をもつ。開口部径が80~99cm、深さ41~80を測る中型のピットは、I02、J02グリッドに7基が集中するように見られ、1mを越える大型のピットはこれらの中型のピットを囲むように周囲に6基見られる。J01-1ピットは底部に集石が見られるが性格については不明である。

I02-3ピット（第29図1、2、写真図版6-105・106）

土器片2点を図示した。2点とも深鉢の体部片である。原体施文後1は沈線、2は隆線により文様が描かれ、2は橋状突起を有する。

I02-2ピット（第29図3、4、写真図版2-7、6-107・108）

土器片2点を図示した。3は深鉢の頸部片、4は口縁部片である。3、4とも隆線による文様が描かれるが、小破片のため全体的な文様のモチーフは不明である。

I02-3ピット（第29図5、16、第25表、写真図版2-7、6-109・120）

土器片1点、石器1点を図示した。5は深鉢の体部片で、渦巻き状の粘土紐貼付文を有する。16は、無茎鑑である。凹基で、鑑身は二等辺三角形状を呈し、側縁は直線的である。

I03-2ピット（第29図6、写真図版6-110）

土器片1点を図示した。平縁をなす深鉢の口縁部片である。口縁に平行するように沈線と刺突による文様を有する。

I03-4ピット（第29図12、17、第24表、第25表、写真図版6-116・121）

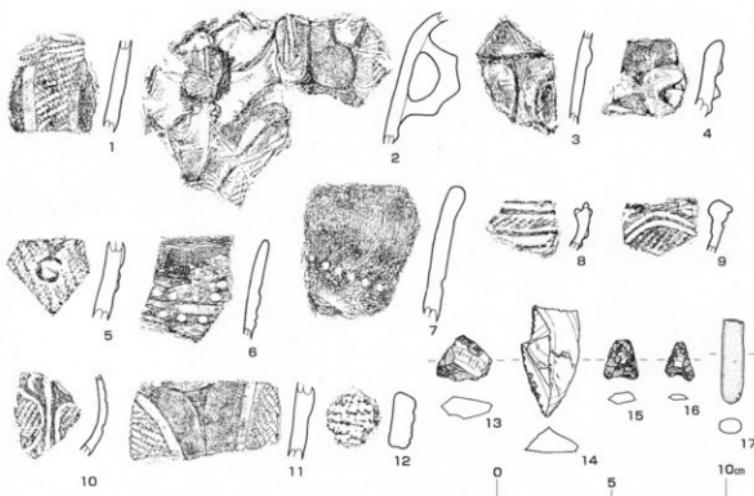
土製品1点、石器1点が出土した。12は全周を打ち欠き、円形に作り出した土製円盤である。17は断面が橢円形状を呈する小形の石棒である。

J01-1 ピット (第29図7~11、写真図版6-111~115)

土器片5点を図示した。7~9は深鉢の口縁部片、10、11は体部片である。7は、平縁をなす口縁を有し、沈線と刺突による文様が描かれる。8は口唇部に口縁と平行するように隆沈線を有し、口縁部内面の口唇部にも沈線を有する。頸部には2条の平行する隆線の貼り付けが見られる。9は口縁部が肥厚し、平坦面を持つ。山形状に二条の沈線を有する。10は沈線と充填繩文による文様を有し、11は隆線と沈線、充填繩文による文様を有する。

J02-2 ピット (第29図13~15、第25表、写真図版6-117~119)

石器3点が出土した。13、14は不定形石器である。13は片刃、14は両刃で、1辺に直線的な刃を作り出している。15は無茎鐵の欠損品である。凹基で、鐵身は二等辺三角形状を呈し、側縁は外弧である。



第29図 H02、I02、I03、J01、J02、ピット群出土遺物

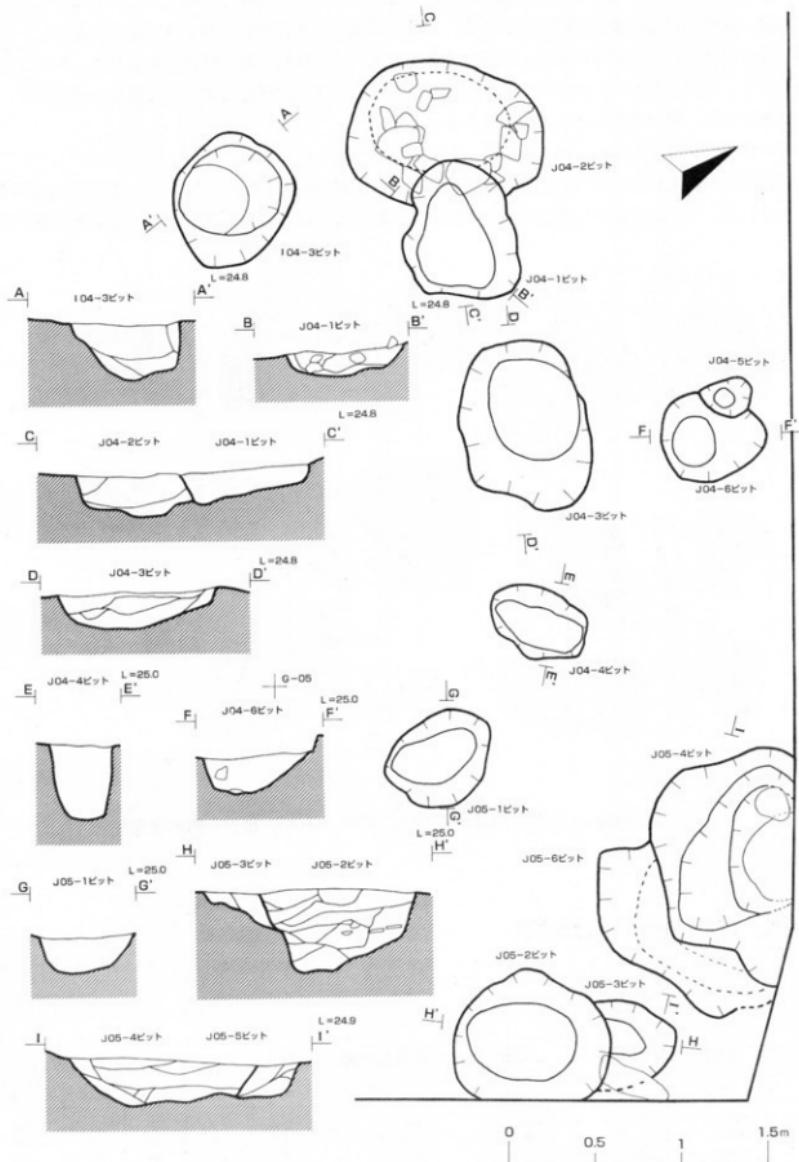
第24表 I03-4ピット出土土製品

図版	通 横	器 種	高さ	幅	厚さ	重さ	備 考	登録
第29図-12 写真図版6-116	I03-4ピット	土製円盤	2.50	2.94	1.1	6.65		980

第25表 I02-3、I03-4、J02-2ピット出土石器

図版	通 横	器 種	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	登録
第29図-16 写真図版6-120	I02-3ピット	石縫	細粒砂岩	1.56	1.25	0.26	0.4	9729
第29図-17 写真図版6-121	I03-4ピット	石縫	細粒砂岩	3.64	1.04	0.66	3.8	9838
第29図-13 写真図版6-117	J02-2ピット	不定形石器	凝灰質頁岩	2.46	2.1	0.88	3.7	9707
第29図-14 写真図版6-118	J02-2ピット	不定形石器	珪質頁岩	4.8	2.56	1.14	10.8	9709
第29図-15 写真図版6-119	J02-2ピット	石縫(欠損品)	珪質頁岩	1.78	1.44	0.48	0.9	9708

e、I04、J04、J05ピット群（第30図、第26表、写真図版3-2）



第30図 I04、J04、J05ピット群

第26表 I 04、J 04、J 05ピット群一覧表

ピット NO	平 面 形	開 口 部 径	底 部 径	深 度	出 土 遺 物	備 考
I 04- 3	円形	80×65	40×40	32	土器片 2	
J 04- 1	不定形	80×65	60×40	13	土器片 22、須恵片 1	J 04- 2 ピットを切る 裏壁あり、J 04- 1 ピットに切られる
J 04- 2	楕円形	113×89	82×59	23	土器片 4	
J 04- 3	不定形	103×72	63×61	20	土器片 4	
J 04- 4	楕円形	58×41	52×22	42	土器片 17	
J 04- 5	楕円形	30×21	12×11	16		J 04- 6 ピットを切る
J 04- 6	楕円形	61×52	29×26	21		J 04- 5 ピットに切られる
J 05- 1	楕円形	64×50	51×27	20	土器片 25	
J 05- 2	不定形	92×77	64×45	43	土器片 12	J 05- 3 ピットを切る、一部攪乱
J 05- 3	不定形	54×40	29×19	24	土器片 3	J 05- 2 ピットに切られる
J 05- 4	不定形	152×114	47×30	28	土器片 16、土器片 1、須恵片 1	J 05- 5 ピットを切る
J 05- 5	不定形	不明	不明	20	土器片 36	J 05- 4 ピットに切られる

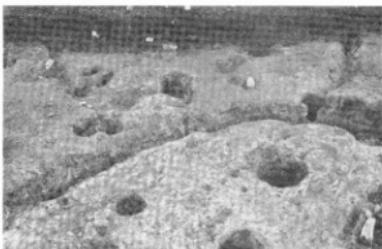
B 区北東側で12基検出した。開口部径 1 m を越える大型のピットは、J 04- 2、3、J 05- 4 ピットの3基である。J 04- 2 ピットは、底部に10~30cm程の礫の集石が見られるが、出土遺物が土器の小破片のみであるため、性格については不明である。遺物はJ 04- 5、6 ピットを除くすべてのピットから土器片が出土している。最も出土量が多いのはJ 05- 4、5 ピットで土器片36点がそれぞれから出土している。これらの土器片は、すべて小破片であるため割愛した。

V まとめ

- 1 今回の貝畠貝塚の発掘調査で発見された遺構は、A区（南側調査区）において竪穴住居6棟、住居状遺構1棟、ピット29基、B区（北側調査区）において竪穴住居3棟、住居状遺構1棟、ピット62基である。過去における隣接する箇所の発掘調査では、縄文時代中期の竪穴住居19棟、平安時代の竪穴住居8棟が発見されており、縄文時代中期、平安期の集落であることが判明した。
気仙地区においては、貝畠貝塚のように竪穴住居が密に検出された例は見あたらず、集落形成を知る上で重要と思われる。また、奈良時代の竪穴住居に関しては初めての確認である。
- 2 時期が確定できた遺構は、竪穴住居6棟である。時期的には縄文時代中期のものがB 01- 1 住居、I 01- 1 住居、G 03- 1 住居の3棟、奈良時代のものがD 02- 1 住居、平安時代のものがA 03- 1 住居、C 05- 1 住居（昭和58、59年の調査で確認済み）の2棟である。
縄文時代中期のものには、前回の調査同様、複式炉をもつものが見つかっている。
- 3 遺構の分布は、A区では調査区西側と中央部ではなく、南壁寄りでは密であった。B区では調査区西南部では遺構は見られないが、ほぼ全面において密に広がる。ピットはA区では少なかった開口部径 1 m を越える大型のものが多く見られ、切り合い関係にあるものが多い。
- 4 出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、土製品、石器があるが、出土数は少ない。
縄文土器は、時期的には早期、中期、後期、晚期のものが見られたが、中期中葉から中期末のものがほとんどである。
土師器はほとんどが壊であり、ピットからの出土が多く G 06- 1 ピットからは10点が出土している。
土製品は土偶、土製円盤、斧状土製品がある。



発掘区全景



A01-1住居跡平面



A01-1住居跡 土器出土状況



B01-1住居跡平面



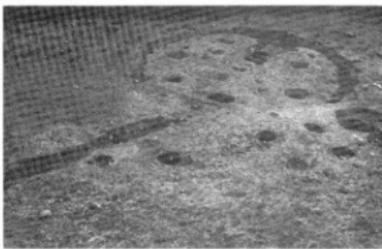
B01-1住居跡 複式炉断面



A02住居状遺構・A03-1住居跡平面



D02-1住居跡平面



A01-1・B01-1・D02-1住居跡・
A02住居状遺構平面



G05-1住居跡平面



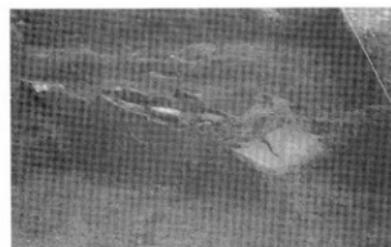
I00-1住居跡平面



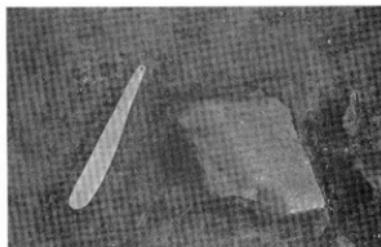
I00-1住居跡 炉平面



G03-1住居跡平面



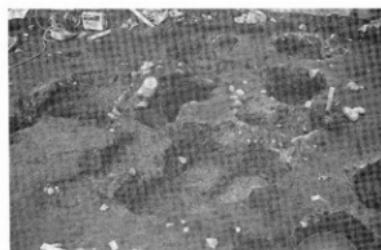
G03-1住居跡 石刀出土状況



G03-1住居跡 土器出土状況



I02-2.3ピット土層断面



I02.J02ピット群平面



H01-3ピット土層断面



J04-2ピット平面



H05-1ピット平面



H04-2ピット土製品出土状況



G06-1ピット土層断面



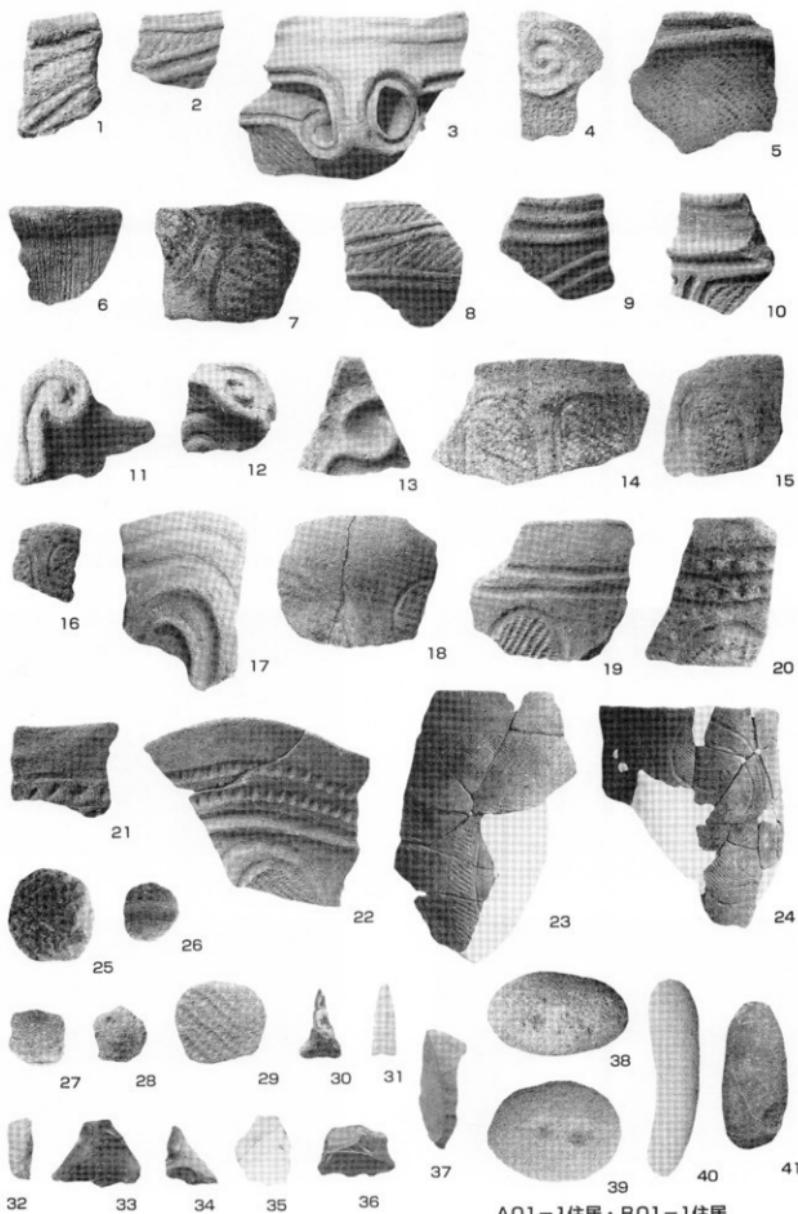
G06-1ピット土師器出土状況



H05-4ピット土偶出土状況



B区近景

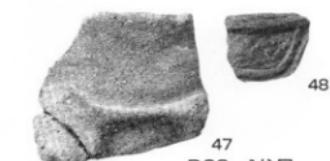


A01-1住居・B01-1住居

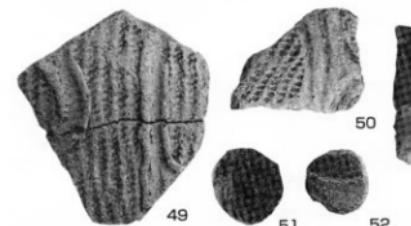
写真図版4



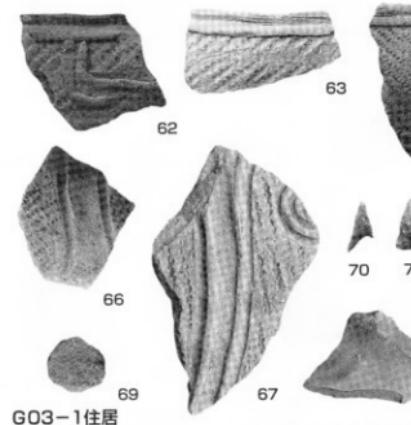
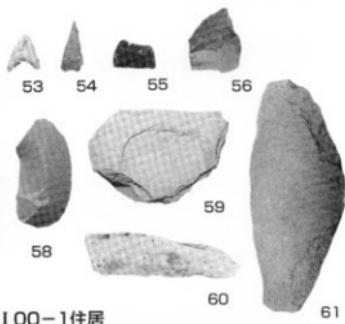
D02-1住居



A02住居状構



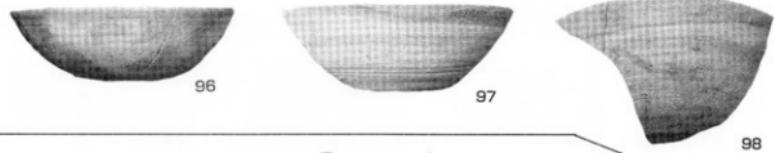
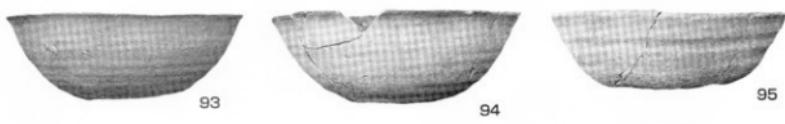
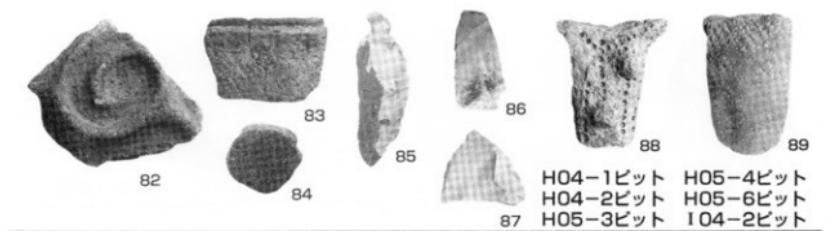
I00-1住居



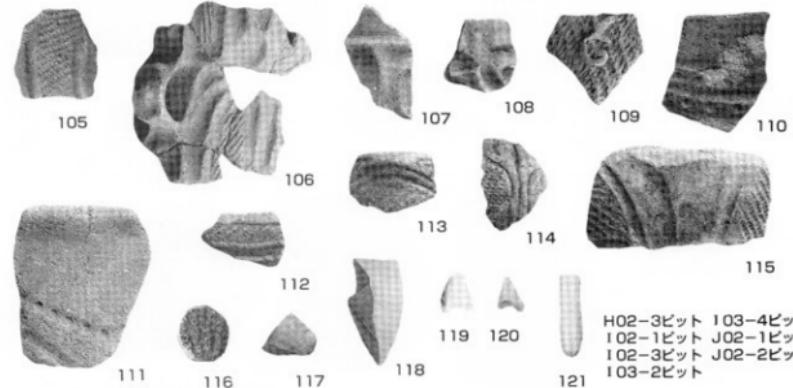
G03-1住居



H04-1ピット・H05-6ピット



H01-1ピット・H01-2ピット・H01-3ピット



写真図版6

報告書抄録

ふりがな	かいはたかいづかはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	貝畠貝塚発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	陸前高田市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第19集							
編著者名	佐藤正彦 熊谷賢 高橋和弥							
編集機関	陸前高田市教育委員会							
所在地	〒029-2205 岩手県陸前高田市高田町字館の沖110 TEL 0192-54-2111							
発行年月日	1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かいはたかいづか 貝畠貝塚	いわてけんりくせんたかたし 岩手県陸前高田市 たかたちょうあさぎにしわの 高田町字西和野		NF67-0147	39度 00分 47秒	141度 38分 20秒	19971015 ～ 19971224	472m ²	宅地造成 に伴う事 前緊急発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
貝畠貝塚	貝塚 集落跡	縄文時代	竪穴住居 住居状遺構 土坑	7棟 2棟 88基	縄文土器（中・後・晩 期） 土偶 土製品 石器 土師器 須恵器	縄文時代中期の集落 跡		
		平安時代	竪穴住居	2棟 3基		平安時代の集落跡		

